301222-000-4

特71-580

青年文學時文斷片

松霞子ノ著

M33. 9

DBB-0017

松霞子著

青年文學

時文斷片

交盛館發行

發逸

題して「青年文學時文斷片」といふ、而かも載する所悉く文學に關係ありと云ふに非ず、唯だ文學に對する門外漢が折にふれたる閑文字たるに過ぎず、無名の記者の述ぶる所、耳を傾くるに足らずとせば即ち止む、唯だ此小册子を鉛塹に上ずる所以のものは、砂礫の間に於ても尚拾ふべきは拾はんと欲ずる人の一讀を煩はさんと欲してなり、敢て卷頭に一言を述ぶ

後園の藤架に紫雲いと艷なる時

京都鴨川のほとりに

編者識

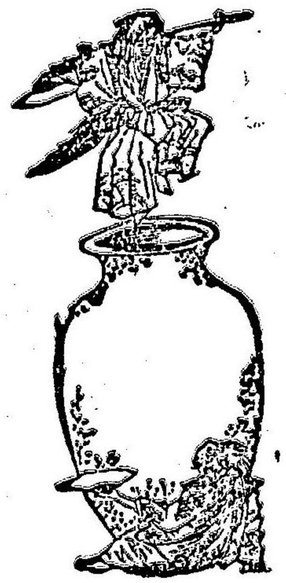
特71
580

国立国会図書館
52.4.15

77W13891

青年文學 時文斷片目次

好尚……（歐蒲公）……一
ジョン、ラスキン……（同）……九
天才と好尚……（同）……一四
旨詩人が失樂園……（青岑）……一七
俳諧景情……（同）……二五
長嘯又長嘯……（青岑）……三六
テニソン……（歐蒲公）……三九
遼東の幽魂……（青岑）……四七



おらが秋……（同）……五三
鉄笛曲……（同）……六九
パレットとペン……（青岑）……七二
我が臥床……（同）……七七
良心と道德……（歐蒲公）……八〇
四季二十句……（愚哉）……八八
小天地……（松霞）……九〇
天才……（同）……九五
樂天厭世及洒脫……（同）……九九
哲學と美術……（同）……一一四
餘裕……（同）……一一八

目次終

一茶の俳句……（同）……一二四
宗教と哲學……（同）……一四三
我國神代の歌舞……（同）……一四五
星光の美……（同）……一五七
冥途の飛脚……（松風）……一六一
山家の夕さり……（同）……一八四
讀書樂……（同）……一九〇

青年文學

時文斷片

好尚

松霞子編

修辭上の法則は古より人の普く嘆美する詩文を推究して選り出せるものにて、これ明に人心に詩文上の是非を感ずる能あるを證するものにあらずや、斯る能力は天然物の上にも人爲物の上にも等しく作用するものにて名づけて好尚といふ、更に之を解けば判斷力と構想力との助によりて、天然物製作品に現はれたる美妙と崇高とに感應し得る心の作用とするを得べし。

好尚は其差こそあれ之をあらゆる人々に見るを得るものにて、三尺の

兒童すら善く形の整然たるものを喜び、肖像繪畫の美はしきものを愛で、珍らしきもの奇しきものなどを好む傾あらずや、下愚なる者と雖も天地の麗はしき景色に對しては嘆賞の聲を斷たざるなり、蠻人と雖も裝飾を好み歌謠を嗜み爽なる辯舌に耳を傾くるなど、皆これ美を感受し得る能ある事を證するものならずや、されば好尚は普く人心に存するものなるを知るべきなり、然はあれども各人一樣に之を有すといふべからざるなり、或は甚だ著しき物にすら少しも感を惹起せざるまで冷き情と鈍き性とを有するものあるべく、或は又さまで美しからざるものにても感ずる事强きものあるべし、斯く人々好尚を異にするは悟性判斷力智力に於けるよりも更に甚しきものあるが如し、これ造化は其廣大無邊なる恩惠を現はすに人毎に別にしたる所以にして、人の

幸福を求むる能力に關しては造化は之を付與するに甚しき差をなさゞれども、寧人生を飾る能に付ては之を分つにつゞまやかにして、大なる修養を要するが如き看あるなり。

次に好尚の元素ともいふべきものを論する前に、古より此語の解說を異にしたるものを列擧せんとす、ヒュームはこれを本然の感性とし、ハッチソンは全く特立したる心の一能力と認め、判斷力にも構想力にも據らずして直に印象を感受し同時に之を判斷して生する快樂と解したり、ブレイヤーは大体に於てこれと同じき解を下したれども、アデソンに至ては全く反對の說を抱きたり、アケンサイドは美妙と崇高とに關する快樂は構想にのみよるものとせり、佛の哲人コウシンはいへらく好尚は複雜せる能力にして之を生ずるに三階段あり、構想と感情

と悟性とこれなりと、其他百家の說く所大同小異なり。

吾人は今之が基礎となるべきものを感性とすべし、されど其感性といふは單に本能性のものをいふにあらずして悟性のものをいふなり、次に好尙の作用に密なる關係を有するものを判斷力とす、固より其判斷をなす間には自ら之を覺知する事或はあるべく或は無かるべし、されば好尙の作用は一は情により一は智によるものといふべし。

次に好尙の性狀に就きて一言すべし、吾人は之を分ちて二とし一を微妙とし一を正確とす、微妙なる好尙とは肉眼の看破し得ざる美を闡明する官能を有するものにして一點の微をも苟もせざるものなり、斯る人の感應性は强大にして又精緻なるものなり、次に正確なる好尙とは健全なる理解力を有するものにして、如何なる物にても之を判するに

當て良智之が素地となるものなれば外面の虛僞に欺かるゝ事なきなり、而して詩文に存せる特殊の美を評價し之を分類し快樂を生ずる所以のものを分析し、而して後其價値に應じて之を享樂するに至るものなり。

吾人は既に圓滿なる好尙には必ず微妙と正確との性狀を備ふるよしを論じたり、此二者は相異なるものなれども幾分かは互に相通ずるものなり、されば健全なる好尙に微妙のみを備へて正確を欠くはあらざるべく、又正確のみを備へて微妙を欠くにあらざるべし、然はあれども二者を完備して更に遺憾なきは稀にして其孰れか秀ずるを常なりとす、

ロンヂヌスの如きは最も微妙なる好尙を有せしかども正確の點に至りては未しきところありき、アリストートルの如きは之に反して最も正

確なる好尚を有せしかども微妙の點は少しく欲くるところありき、近代にては微妙なる事アデソンに勝るものなかるべく、正確なる事ヂョンソンとケームスとに勝るものなかるべし。

次に好尚の標準とすべきものを論ずるに當りて、好尚は常に一定して各人不同のものなりや否やを攻究すべし。

之を歴史に徴するに人の好尚は時代によりて變更し、又同じ人にありても老少によりて其の趣を異にせるを見る、これ好尚の一概に評價しねざるやうひふものある所以なり、其說くところに曰く、人各性情を異にすれば其嗜好を同じくすべからず、且つ常に同樣の心調を保ちねざるものなれは隨時に其感を異にす、甲の見て美とするもの固より美なるべく、乙の聞て佳とするもの亦固より佳なるべし、然れども甲の

美は乙の關せざる所にして乙の佳は亦甲の關せざる所なり、此間其好尚を上下すべきにあらざるなりと、蓋し一理なきにあらざるべし、されど人毎に好む所に任じて其果して眞價の孰れに存せるかを攻究せざるに至りては、其局吾人は亞弗利加人の好尚をさへ是認せざるを得ざるべく、エスキモー人の嗜好をさへ首肯せざるを得ざるに至るべし、此れ豈に文化の進みたる人情の成し得べきものならんや。

然りと雖も人の好尚は又必しも單一にすべきに非ざるなり、蓋し好尚の歸着する要點は美にして、美を表現する方法に多樣ある以上は、乙の異なりたるものに對して嗜好を異にすべきは當然なり、故に或る者は音樂を愛し、或る者は詩歌を喜こぶべし、又其同じ詩歌といふうちに或る者は戲曲を好み、或る者は叙景詩を愛すべし、然れども一物に對

する衆人の好尚は決して然かく多樣たるべきにあらざるなり、今若し一物を見て一人は之を美とし一人は之を醜とせば、吾人は二者共に之を是認すべきか如何に、これ既に好尚の多樣なるに非ずして其觀察の當を得たりや否やといふ問題なり、

然らば何物が賞美すべき標準なるやと見んに、繪畫詩歌等に於ては天然景の表現にありとすれば、天然は之れが標準たるべくして、其作物の善く原物を描き出せりや否やを驗すべきなり、換言すれば忠實に天然を模したりや否やといふにあり。

天然が好尚の標準となるは僅かに一例に過ぎずして、吾人は尙他に其の據るべきところを探求せざるを得ざるなり、これを圓滿なる賞鑑者とす、圓滿なる賞鑑者とは諸の精神作用が最も完全に發育し、諸感能

は常に活潑にして判斷力の健全なるものを云ふ、かゝる人の好尚上の見解は正確なるものにして、これやがて衆人好尚の則るに足る根據となるものなり、然れども人は固より然かく完全なるものにあらざればかゝる理想上の賞鑑者はあり得べきにあらず、然らば如何にして吾人は好尚の標準を求むべきか、曰く多數の人の美となすものこれなり、蓋し多人數の美とするものに醜なるもの少ければなり、さて其多數の人といふは文明の空氣を呼吸し深遠なる學術を咀嚼し、文學美術に堪能にして天才の技倆を感受すること厚きものたるべきは論なきなり。

ジョン、ラスキン

美術評論家として最も卓越せるものをジョン、ラスキンとす、一千八百十九年二月八日ロンドンにて生れき、幼より自然を愛する情强くして

觀察の力も亦極めて鋭敏なりき、長じて美術の研究に一身を委ねて終に有名なる評家とはなりたり、家もと酒商なりければ父は屢々商務を帶びて歐大陸に旅行しけり、ラスキンも亦常に之に伴ふ事を得て各地の風景美術に通ずる事を得たりき、父死して其富める遺産一に彼が手に歸したりければ、今は擅まゝに之を已が好める研究に費す事を得たりき、彼が幼時の教育は甚だ不規則にして普通教育の課程をも履まずしてオックスホールドの基督大學に入る事を許されたり、一千八百三十九年募に應じて一篇の詩を草して賞を得たり、後畫を學びたりしかど天稟の才能は却て文學に存せしかば雄勁なる評論は綴々として現はれたり、彼の有名なる「近代畫家」は即ち彼をして一躍して評壇に上らしめたる大作にして、時に齡僅に二十四歳なりき、其の論ずる所は英

國畫工の天然を描く技量は近代の方古代よりも優れたりといふにあり き、全篇總て五卷なり、此書世に出でゝ英國文壇は非常に振蕩したり、其は其論の斬新なると其文の巧妙なるとが一方に於ては激しき反對者を生せしめ、一方に於ては夥多の歎美者を生せしめたればなり、一千八百七十七年彼は選ばれてケンブリッヂの講師となり、越ゑて二年にしてオックスホールドの美術教授に選ばれたり、後三度選ばれて此の講座を擔在したりき。

一代の著作極めて多し、上述の書の他に重なるものを擧ぐれば「建築術の七燈」「ラッファエル以前の畫風」「繪畫の原素」「美術經濟論」など なり。

今彼れを評論するにピータ、ペインの言を以てせんとす。

英語を話し得る所にて彼の名の永久に記憶せらるゝ事は、彼が自然の風光を言語にて彩りたる畫工なりとしてなるべし、彼が同代の人心を感せしめし事は彼が描きたる繪畫にはあらずして其書冊にてありき、而して其及ぼしたる感化は單に繪畫上のみに限らずして廣く文學上社交上にも亘りたり、嘗てターナー（英國の有名なる風景畫家）が其繪畫にて直接に人心を感せしめたるは、ラスキンが書冊にて間接に自然を人心に印象せしめたるに如くべくもあらざるなり。

夫れ自然の美を感受する能の彼の如く卓越し、又自然の眞を認識する力の彼の如く卓越せるものは、見るもの聞くものを悉く秀麗なるものに化せざるはなし。彼が耳には山岳も聲あるべく、河流も樂ならざるはなし、又彼が目には海洋も長閑なるものとなり、白雲も輝かざるは

なきなり、實に彼は一面には自然の神秘を解する僧となり、他面には自然の慈惠を配つものといふべし。

されば人々の彼れを詩人と呼びたる事至言といふべきなり、彼は美妙の魔力ある言語もて自然といふ一大活畫が、開闢以來年老いたれども少しも穢れず損はれずして常に新鮮なるよしを說きたり、蓋し自然の美は諸の美術が墓する所なれども人の之に接する事幼少より斷へざるまゝ、往々其美を看過し易きものなればなり、彼又人に想はしむるやうホーマルの代に薇薔色したる曙の樣は今も尙朝々然らざるはなしと、又いふやう旭の大海原に照りまさりて黃金色を浮ぶる樣は今も昔も異なる事なしと、又曰く眞に自然美を愛するものは清水の噴き出づるはとりと、若葉の繁れる下とにて陽春の來れるに遇はゞ未曾有の美を

認めざるを得じと、彼が文に接する時は吾人は忽然として宇宙の大とに臨する新智識を感じ而て宇宙の何たるかと、如何にせば善く之を感じ得らるゝかを明かに教へらるゝが如きを感ずるなり、彼又曰く夏は吾等に豊なる風光を供し、此の風光が微笑みながら莊重と悲壯との樣して死するときを秋とす、冬は即ち萬物の滅する期にして其去るに臨みて吾人の遺すものは、木枯の樂と秀美なる雪霜となり云々と、蓋し彼の如きは實に能く自然と契合せしものと云ふべきなり。

天才と好尚

天才と好尚との二語は通用せらるゝ事常なるが故に、粗忽なる記者は往々其異同を辨せずして用ゐるに至れり、されど此二語は全く相異な

る意義を有するものなれば、明に其別を立てゝ之を記憶せむ事肝要なり、好尚は又之を嗜好ともいふ、主として判斷力によるものなれども、天才は專ら實現力によるものなり、繪畫音樂詩歌其他の美術品に深高なる好尚を有するものは必しも之を創作する天才を有せざるものなり、然れども天才に至ては大に然らず、そが創作の才には兼て好尚の伴ふとなくばあらざるべし、かくて天才といふ語には常に創作構造などの意を含みて、單に其存せる美妙を感ずるに止らず、更に進みて此美を巧妙なる技術にて實物に現出して、以て能く人心を感動せしむるに至るものなり、これ善く修養したる好尚は時に良評家たることを得しむるとあれども、圓滿なる天才は必ず詩人畫工たることを得しむる所以なり、されど通常の意義にては天才の語は漸くうの應用せらるゝ純四

を賞めゆきて、好尙の語の唯美術品にのみ限らるゝものと異なるに至りたるとは知らざるべからざるなり、そは人とし天稟に或る事物に卓越するところあれば、其才幹を稱して同じく天才といふと往々あるにて知るべし、是に於て政治上の天才、兵法上の天才、學術上の天才など既に珍しからぬ成句とはなりぬ、而してこが或る事物に傑出する才幹は天稟なると固よりなれど、技術と學術とは更に之を進歩せしむるものなり、さりとてそが術と學とのみにては到底修得せらるゝものにあらざるとは明なり、天才は好尙より高貴なる能力なれば造化は容易に之を付與せずして、かゝる名人の現出すると稀なるも自然の勢なり、繪畫音樂詩文等の諸藝に高尙なる嗜好と卓絕せる審美眼とを有せる者は、世上に敢て乏しからぬど是等の諸藝に精通して善く之を創造し得るものに至ては、其得難き事實に同日の論にあらざるなり。

盲詩人が失樂苑

希臘にホーマーあり、伊太利にダンテあり、而して英國にミルトンあり、ミルトンは實に英國文壇の明星といふべし、マコーレーは贊して英文學の光彩といひ、ヒユームは贊して有ゆる詩宗の最も壯廠なるものといひ、而り壯麗なる韻士として、莊重なる政治家として、淸廉なる宗敎家として、將た沈痛なる思索家として、吾人はその一介の盲詩人が英文史上に巨影を畫するを見て大に壯とせざるを得ざるなり。」由來西歐の文士にして面目の眞ならざるは稀なり、之を政界に貨して政見の確たらざるは少なく、之を學界に賣して學殖の深からざるは少

なく、之を宗教界に施して眞度ならざるは少なく、之を經濟界に施して有爲ならざるは少きなり、宜なる哉、東洋の風流韻士が徒らに悠々を粧ひて朝に江山を弄し夕に風月に戯るが如きに比すべからざるもの、多きを、彼等既に胸中天下を經營する抱負と衆愚を指導せんとする赤心とあり、而して筆を驅て文界に立つ其作や優健、其想や高逸、時に或は人心の琴線に觸れ、時に或は宇宙の眞諦を闡くに至る、此の如きもの到底文事を以て遊戯の一に數ふる民族の與り知る所にあらざるなり、「アリヤン族」の文士が常に多角形にして總ての点に眞面目なるを概ね此類なり、而もミルトンの如く深刻眞摯なるは比類稀なりといふべし。

嘗て獨逸文字の我が國に唱せらるゝや、レッシングの名は翕然として

傳へられき、然れども人の彼を曰ふもの、その不世出の評家なりしに由るを以てして、その熱誠なる宗教家なりしを以てするもの曉星寥嘆なくんばあらざりき、而してミルトンの名の我が同胞に誦せらるゝもの亦實に此類ならざるはなきなり、彼が失樂苑の作者として文字に富饒なりしと風調に高逸なりしとは人これを知る、然れども彼が出版の自由を叫び信教の自由を叫び、英人今日の自由思想を三百年前の昔時に開殖したるに至ては、之を知るもの多しといふべからざるなり、吾人は我が同胞が遂に詩人の名に眩じて彼が有爲の一偉人物なりしを逸失し了らざるを欲して止まざるなり。

彼が六十六年間の生涯は決してかのエリサベス朝雲の如き詩人が行動したるが如き旦々たる一直線にてはあらざりき、然れども其錯雜した

る一生にして必しも一点の中心点を探り得られざるにはあらざるなり、若しミルトンの精神的活像を抽かんとするものあらば余は其の視点の斷じて失樂苑に存ずを明言せんとす。

ミルトンに失樂苑ある猶魚の水に於ける如きか、吾人は水を離れて魚を考へ得ざるが如く、失樂苑を除きて此盲詩人を想ひ得ざるなり、其の両々相持するの深き、而も失樂苑の行文がミルトンの行動にあらずして、彼をして此作を編せしめし所以のものは、吾人更に車の軸に於けるを以て之を比せんとす、蓋し車輪の回轉するや、其動力が常に車軸に向て集中するが如くミルトンの宗教思想若くは人世觀は常に此長詩の起草に集中したればなり、彼れ幼少にして既に胸裏一團の精魂は人生墮落の悲運を描かんとの希望を抱き、爾來念想の深き一年は一年

より其希望を強め二年は二年より其宿志を固め、終に晩年にして大成するに至れり、エマーソン曰く人は書かんが爲に生れたる者なりと、ミルトンの如きは實に書かんが爲に生れたるものといふべし。

失樂苑十二篇、悉くこれ金玉の文字なり、其聲調の高嚴なると錯辞の壯麗なるとは彼が人格に於て風霜の落々たりしが如く亦實に天下に逸せり、之を李園を閉ざし美術を蔑視し文学を輕侮したりし清教徒(ピュリタン)の輩より見るを得んとは寧奇中の奇といふべきなり、然りミルトンは熱誠炎ゆるが如き清教徒なりしと雖も、徒らに粗笨を喜び一毫の好尚すら有せざりしが如き固陋なる清教徒にてはわらざりき、且つ夫れは當時文學の評論漸く新面目を保つに至るや、古典を渉獵すること深かりし彼が筆端には「エリサベス朝」詩人が動もすれば陷り易かりし虚偽なる空

想と不健全なる好尚との迹を見るを得ざるなり、若し「エリザベス朝」の文學を以て輕文學の最も輕妙なるものとせば彼の文字は正に重文學の最も莊重なるものなり、吾人が英文史を繙き「ドラマ」が旭日の勢を以て十分の發達をなしたる後十七世紀の初期に入りて宗教文學の起らんとするに至るや、江南春光沒して緣陰漸く柴門に深からんとするを念ひ、ミルトン出で失樂苑現はるゝに至りて桐天高く秋氣の晶々たるものあるを感ずるなり、而してバンヤン來りドライデン來るに及びても萬目蕭條として寒鴉の枯木に在るを念はざるはなし。

失樂苑のミルトンが中心点なるは既に一言したり然れども中心点として此作が果して能くミルトンの眞相を當時の人士に描かしめ、及び後代の讀者に描かしむるを得たりしか、吾人は源語を讀まずして紫女を

喋々し犬傳を閲さずして馬琴を喋々するもの我が讀書界に珍らしからざる現象なるを知るが如く、英國の讀詩界にも亦失樂苑が空しく彼等の文庫の一裝飾品となり了るの光景あるを一言せんとす、而してこれ實に其文辭の佶屈にして故事古典の解し易からざると、其書冊の長大にして一朝夕の能く讀み盡す所にあらざるとは、忠實ならざる讀者が忍耐を持せしむるに至らざるに坐すものにして、マコーレーが崇拜的贊辭を以てして尚且つ公平なる評家は此作に無瑕を許さゞるべしといひし所以なり、テイン亦之を評して壯麗なる難詩といひき、然りこの壯麗なる難詩、容易に俗耳に入るべくもあらず、當時書肆の喜んで刊行を肯せざりしも是非なしといふべく、斯る天下の逸品をして僅に五ポンドの黄金に代へしめたるは、盲詩人盲せずして時人皆盲せるに

非ずして何ぞや。

既に閲讀に難事あり、而も評家は其稀世の傑作なるを唱ず、一人賞して一人之に和ず、未だ讀まざるもの既に讀めるを爲ねし、既に讀めるもの亦徒らに先人の讀めるを倣ふて喋々ず、是に於てか乘相擁して其作の非凡なるを稱ふ、これ猶一犬虚を吠へて万犬實を傳ふが如きもの、吾人は日々に市井に虚實の聲言喧しきに殆ど聾せずんはあらざるなり、ジョンソン嘗て巧に此狀を叙して曰く失樂苑は世人妄りに賞贊を付するのみにて彼等贊すれば即ち之を左右に措き復手にするを忘るなり、偶ま讀むものあらんか、これ悞樂を得んとて讀むに非ずして寧一種の義務として繙くなり、而して其讀むや、全く教訓を聞くが如くして疲勞を感ずること少からざれば讀後更に他書に就きて休養を求むと、

蓋し通俗讀者の智力に乏しく想像に欠けたる、斯る高妙なる長詩を味ふを得ざるなり、マコーレー又ミルトンが作を評して曰く彼が詩は讀者の思想の作者と融合するにあらざるよりは了解し得べきにあらず又以て快味を得べきにあらざるなりと、而り滔々たる讀書界の然かく教養せられたるなく然かく思想に欠損せるとは到底大詩人の錦腸を窺ふを得べきにあらざるなり、而して彼等嚣々として妄りに大作を詩人に迫らんとす、嗚呼詩人の事業又難き哉。

俳諧景情

一景によりて情起り情をもて景を思ふ、脆きは人の心なる哉、この脆き心ありて人は詩を作り歌を咏じ文を草し俳を吟ず、定家嘗て歌の

作意を唯心の細かに行き渉るところといひぬ、然り心の脆きところ心の細かに行くところ詩の發するところならずとせんや。

一古の吟士身を奉ずる甚だ重く其の作を奉ずる亦甚だ重きなり、貫休句を得れば先づ佛前に供し、浪仙は両句三年得、一吟双涙流といふ、「僧敲月下門」と「僧推月下門」と孰れか善しと凝思して落馬したるは一字を苟もせざる話柄ならずや、

米洗ふ前に螢の二つ三つ

のには

米洗ふ前を螢の二つ三つ

のをの活動せるに如かず、僅に一小コビユラヨして一句の生命を左右すると此の如し。

一其角に「句兄弟」の編あり、今誠に「句好」といふものを作りみんか、

物の音ひとりたをるゝ案山子哉　凡兆
物の音は水飲む獺と案山子哉　雲口

螢火は野中の虫の炎かな　貞徳
螢火は河の春中の炎かな　立圃

初空や鳥も吉野の方へ行く　千代
吉野から鳥も戻るや桃の花　仝

この他「赤蜻蛉羽を取たら蕃椒」「蕃椒羽を附たら赤蜻蛉」も一對の句好なるべく「春立つと天に札うつ霞哉」「名月と天に札うつ光哉」もこの流なるべし。

一大名と寒さとは面白き俳句を舊幕の世に傳へぬ、ストプある今の華

族は如何なるものを咏ずらん、

正客の行儀くづさぬ寒さ哉

これ野坡の大名を咏じたるもの、利牛は又

れき〳〵の水涕たる〻寒さ哉、

の句を大名に代りて吟じぬ、晉て許六が旅の賦に

大名の寐間にも寐たる寒さ哉、

あり、おはれにをかしといふべし。

一晉て嵐雪に句あり、

きり〳〵ず鼠の穴に鳴き終りぬ

といふ、結句六字あり、淺薄なる句調論者ならば「鳴きをへぬ」とも、せんか、而も恨むらくは晩秋萬目凋傷せんとしつゝある景情を盡さ

いるを、若しこれを「鳴きやみぬ」としなば瞬間の景に限られて一宵は一宵より淋しきを加ふの情を描かざるに至らん。

一三十一文字に回文あり、十七文字に回文なしとせんや

まつの木のゆきやはや消ゆ軒のつま　卜宅

なかしつゝ波白しみなつゝしかな　冰花

隨分窮したりといふべし、更に物の名を十七文字に探らば

鵜　鶴　鸞　鵠　鴛　鴦　鳴　雁　菊峰

うつるらん時日はをしとひしきかり

加茂鳥羽紀ノ瀬水野淀　立吟

かもとはてたゝ巣にやせし水のよと

など得ん、而も徒らに句を弄するに止りて妙味少きはお氣の毒とや

いはん

一世にて心得ぬふしを書き傳へて物々しく勿体をつけんとするものあり、芭蕉が古池の吟もその一なるべし、昔者弘仁帝小野篁の詩才を試みんとて白居易が「閉閤唯聞朝暮鼓、登樓空望往來船」の空を遙と改めて示せしに篁は空に復せしとか、篁の詩文さるとながら白居易の詩を知らでありるべき、疑はしき逸話なり、又むかし任翻台州寺壁に題して「前峯月照一江水、僧有翠微開竹房」と作りて立ち去りしに客あり筆を執りて一を半に改む、任翻行くこと數十里にして半の字を得て歸り改めんとせしに既に人の雌黄の後なりきと、吾人は其事の眞僞を疑はざるを得ざるは勿論一と半とが然かくこの句を上下すべきかを怪まざるを得ざるなり。

一これも亦この流の話なり、廣瀬淡窓の門生「板の間に下女とりおとす海鼠哉」の句を得て師に示したるに繁に過ぐと評せられ「板の間に取りおとしたる海鼠哉」と改む師評して前句に勝ること數歩唯情簡を欠くと門生更に改めて「取りおとし取りおとしたる海鼠哉」と師是に於て好句と許せしとか、われは三句共感吟とは思はざれども强いて選ばしめば寧ろ初吟の趣味多きを取らん。

一芭蕉嘗て某侯の爲に月に白蕨を畫ける幅に賛して

白露をこぼさぬ萩のうねり哉

といふ後其角、侯の許にて此句を見、直ち筆をとりて

月影をこぼさぬ萩のうねり哉

と改む後芭蕉再び侯を訪ひしに侯恐るゝ右の一軸を取り出して示せしに太く感じて角は身が門弟なれば身も及ばぬふし少からずとい

いしとか、心地よきといふべし。

一これは心地よからぬ話なり、芭蕉嘗て近江八景を一句にしていはく

七景は霧にかくれて三井の鐘

偶々惟然傍にあり、某ならば

八景の中吹きぬくや秋の風

と吟せんと芭蕉怒りて汝輩の知るとならずとて破門せりと、これ惟然の十傑に洩れたる所以か、而も芭蕉の句は八景を數ふる迹見えて小細工の嫌なきを得ずわれは寧ろ惟然の自然多きを取らざるを得ざるなり。

一支考未だ見龍と号し麥林舍の門にありし時一日乙由の留守に來りて床柱に「見龍發句麥林に及ばず、麥林附句見龍に及ばず」と戲れ書きたるが麥林歸り見て心よからず思ひしが後見龍の來れるに際しわが附句亦汝に劣らんといひしに見龍さらばわが句に附け給へとて

眞ッ黑に白くれなゐにくるくると

乙由即席に附けて

車の牛の雪の夕榮

見龍更に一句を望みしに乙由

宵闇に卷く源平の旗

更に亦一句を望む乙由聲に應して

頭巾で忍ぶ傾城の裾

見龍舌を卷き新句を出して曰く

やれ〳〵と助けたうありことはうあり　見龍

はしりかゝりて岸につまだつ　乙由

珊瑚珠の割れて飛んだを不審がり　見龍

門から逃る鰹の臆病　乙由

遂に見龍附句麥林に及ばずと改めたりとか。

一耳社翁素因はわが郷の俳人なり、嘗てわれらの名の埋れたるを啓きて世に紹介したるとありき、而も傳記者のパーシャルテーはわが筆を驅て彼を眞價以上に現せしめたる恐なきを得ざりき、然れども亦彼に好句尠きにあらず、唯孤落なる天明の俳壇に蕉風の遺流を傳へたるもの彼に於て見るべきを知るなり、

とく〳〵の清水哉軒のしぐれ哉

見るうちにひざり火細るしぐれ哉

藻がくれに身を鳴く虫や今日の月

是等は其秀の秀なるもの、嘗て西行を贊して曰く

江口出でゝ又木枯の寒哉

尚數句をこゝに錄せんか

うら枯や夕日も黃ばむ窓の影

虫の音や蚊帳の寢覺も草枕

月落て柏子早まる砧哉

ろの秋冬の季に好句多きは淑を極致としたる蕉風の名殘なればなるべし

秋風にさらり底ぬけ袋哉

これその辭世、また秋風の辭を見る、彼は到底元祿の文華を夢みた

りし風流修行者の一に過ぎずといふべし。

長嘯又長嘯

南紀砂白く松青し、獨り月明に乘じて汀浦を逍遙す天地悠々長嘯して三更に至る。

燕雀焉ぞ鴻鵠の志を知らんや、而も知らず、鴻鵠焉ぞ燕雀の志を知らんを。

勝軍の名譽を知るものはあり、敗軍の名譽に至ては之を知るもの甚だ少し、汝若し天の爾を著け得ずんば希くは魔の冠を著け。

琴彈すべく詩唱すべし、而も有絃の琴を彈ずるは無絃の琴を奏するの佳趣多きに如かず、有韻の詩を唱ずるは無韻の詩を誦するの雅味深きに如かざるなり。

俗、俗を罵り、非俗、非俗を陷る、焉ぞ知らん、罵るもの又互に俗を以て許し侮るもの又互に俗を以て相許すを。

交るべきもの何ぞ必ず友のみならんや、寒燈獨り書と談らは如何、而も讀むべきもの何ぞ獨り書のみならんや、自己讀むべく、宇宙讀むべし、これ豈に大なる讀書ならざらんや。

友重すべし、而も敵の重すべきを知らざるべからず、我に作し能ふを示すは友なり、我に作さざるべからざるを敎ふは敵に非ずして誰ぞ。

文は朴なるべく巧なるべからず、然れども大巧の朴なるに非ずんば至文なりがたし、故ある哉、文の書出でて文漸く弱く、文の爲に文を作るに至て文漸く弱きに至れるや。

心の至る處筆至らず、是れ文の凡なるもの、心の至る處筆亦至る、是れ文の精なるもの、若しそれ筆の至る心亦至るに達せば文の神なるもの、人の眞なるものすらずして何ぞや。

大業成り難く壯心消え易し、百千の苦痛汝を犯さば、汝千萬の鋭氣を以て之を忍べ、而して後徐に苦痛が汝に遺せしものを翫味せよ、辛酸必しも辛酸ならず、此間甘味の津々たるを發見せん。

一譽即ち喜び、一譏即ち怒る、而して知らず汝の喜怒は人の譽譏を値したるや否や、哲人曰ふ衆之を好む必ず察せよ、衆之を惡む必ず察せよと、何ぞ汝の己を知らざるの甚しきや。

高曠なるべし、疎狂なるべからず、縝密なるべし、瑣屑なるべからず、沖淡なるべし、偏枯なるべからず、嚴明なるべし、激烈なるべからず、

人然り、文然り、事亦然らざるはなし。

人を動すもの、曰く道義、曰く名利、曰く戀愛、道義によりて動くものは壯、名利によりて動くものは俗、最も詩的にして深刻なるは戀愛か。

義の爲に死するものは眞を蹈て眞に出つるなり、思の爲に死するものは善を蹈て善に出つるなり、若し夫れ美を蹈で美に出つるに至ては獨り情の爲に死するものか。

テニソン

近代英國の詩人中に最も多くの讀者を有せるはテニソンなるべし、斯く多數の讀者の心情を動すに一種の魔力の存せるが如き觀あるは主と

して何に因るか、吾人は其の作にあらはれたる彼が性格と、其の巧に配せられたる韻律と、其の吟詠に上りたる詩材とを一考すれば、明に之を知るべきなり。

凡そ詩歌は作者無形の思想が有形の節調にあらはれたるものなれば、作者の精神の如何を知らざればそが詩の風調は到底評せられざるものなり、されば今テニソンが作を論ずるに當て、先其の精神を窺ふ事決して無益にあらざるべし。

テニソンが作を通して一貫せる思想及感情の顯著なるものは、彼が心靈界と感覺界とに微妙なる天則の支配あるを認めたる事これなり。彼はあらゆる事物が天則の下に常に完全の域に進みつゝあるを信じ、自然界の諸現象といふはこの大なる目的を追ふ宇宙の階段なりと考へたり、斯く彼が天則の萬物に普遍せるを認めたるは、其自然を解する思想と人間の行爲を詠ずる次第とを推究すれば、明に其の然るを知るべし。

抑も自然とは如何なるものか。シエレーは之を愛の精神と解し、ウワーズワースは生命ある思想と思惟したり。而してテニソンに至てはこの両者を合して天則の進路と解したり、彼其親友の早世に遇ひし時悲嘆措くと能はざりしかとも、尚ろの歌ふに當ては「余は自然を呪ふべきにあらず、死も亦呪ふべからず、ろは天則を離れて迷ひ路に至るべきにあらざればなり」といひたるが如き、實に彼はあらゆる現象を以て上帝が人類に命したる行路を追ふものなりとしたり、彼又歌ひていはく「哲人はいふ、上帝は天則なりと、然り天に雷あるも亦天理なり、

そは神の聲なればなり」と。

次に彼が戀愛に對する思想を窺ふに、均しく莊重自制の精神かその詩句を組織せるが如きを覺ゆるなり、テニソンには戀愛は實に純潔なる情なれば、そのランセロット、グイヲヴーの如き痴情すら之を描くに當ては心靈上の見解よりなしたり、彼が理想とせる戀愛は既婚の者にしてはしめて見らるべきものにて、眞正の愛は婦人を婦人として尊敬し、且つ之に對する義務を果すにありと思惟したり、而して斯る愛は男子の最も高尚なる精神行爲の根元となるものなりと。

次にテニソンが風景美に於ける好尚を見んに、彼が秩序を貴ふ情は天然景の記載にもあらはれたり、彼もとより矯激なる風景を描きたるとあれとも、自國の靄然たる風土を詠したるもの更に多かりしなり。

次に彼が詩篇の特徴といふべきものは、その風調の極めて高尚なるとなり。彼が筆端に上りたるものは如何なるものと雖も悉く然らざるはなし、又其感情は最も健全にして素朴なりしかば、讀者は之を解するに難からずして同情の念を起すこと大なり、かくて彼は複雜多岐にわたりたる性情、又は卑劣なる情の過激に失したるものなどは勉めて描かざらんとしたるが如し、彼は其詩に於て敦厚なりしが如く其人物に於ても敦厚なりき、彼か常に固守し且つ實際に行ひたる道德は、英國交際社會の賴て以て存立せる所以のもの、純の純なるものなりき。

今彼が詩篇の價値を評するに當りて、吾人は彼が好評を博するに至れる二大物の存せる事を認めざるを得ざるなり、そは彼が詩人としては現世紀の英國文壇を代表するに足る資質を有せしと、又藝術家として

は善く成効したるものなりしとのことなり、先つ彼がいかばかり當代を代表したるかを見んに、宗教上道德上社交上彼の詩は凡て此等の問題に關する當時の輿論に反照したる觀あるなり、これ其の歌ふところの必しも最も進歩したる思想にてもなく、又最も斬新なる想念にてもなき所以なり。然れとも其の作に見ゆる所は當時の眞相ならさるはなく、皆同時代人の修錬と經驗との結果なりき、彼が名著といふもの皆當代の大問題に關せさるはなくして、無雙の興味を讀者に與へたりき、而してかゝる詩篇は實に五十年間陸續として世に出でたり、今序を追ひて、之を略述すべし。千八百四十二年梓に上りし「ロッキーポール」は改進派の希望を詠したるものにして、作者を先つ人物の口をかりて自家の感慨を泄したる後に「ヴイクトリヤ朝」の初期なる改進派の熟望を

叙するとを努めたり、又其の後年に及びて「六十年後のロッキーポール」を作りては時の保守派が抱ける思想と疑惑とを歌ひたり。「ゼプリンセス」は當時最も趣味ある新問題なりし女權論を韻語にしたるものなり。「美術殿」は當時一派の審美家が美と眞とのみを重して徒に出世間の弊に陷り、さては人類として日常の義務責任の忽にすべからざるを度外視するに至れるを諷刺したるものにて、暗に眞善美の相關を唱へたり、宗教上これと同樣の意を歌ひたるを「セント、レモン、スタイリテス」とす、これ即ち主我枯禪主義の弊を難じて社會の義務の重ずべきを說きたるなり、彼が名作中の名作として最も善く知られたるものを「イン、メモリアム」とす、これ此溫厚誠實なる作者が情誼を親ふに足るべき詩篇にして又當時の思想を歌ひたるものなり、ろをいか

にといふに此詩は信仰と愛との闇につゝまれたるよみぢの谷より懐疑の里を過りて來世の希望に到りうべき行路を詠じたるものなればなり。

「モード」はクリミヤ戰爭前にあらはれたるものにして、當時英國の商業大に振ひしが之に反して世道人心の日に〳〵腐敗に傾きゆくを慨したるものなり、以上述べたるが如く彼の作は常に時勢の影ならざるはなかりき。

次に藝術者としてテニソンの技倆を見るに、其詩の好評を得たる所以の益々偶然ならざるを知るなり、先つ彼は天然を觀察するに甚た細微なりしと其一なり、これ其詩材の豐富にして又活動せる所以なり、次によく古今の詩人を咀嚼したると其二なり、次に語句の用法に卓越なる能を有せし事其三なり、次にあまりに平凡なることを避けて趣味の

粲然たるを免かれたること其四なり、次に辭句と韻律との調和をよくして美妙なる風調を整へたると其五なり、この點に於ては英國の文學史上能く彼に比肩すべきは一人もなかるべし。この五のものゝれは彼の詩の不朽に傳へらるべきは言を待たざるなり。

遼東の幽魂

あはれや野ゆき山ゆきて
　草むす屍曝らしてし
兵者どもが魂の
　夢の迹とふたてさよ
とこしへ眠る枕邊は

御國の領地とたのしみて
北京の城を夢みつゝ
御稜威を夢みぬ夢はなし
されど雲井に星飛びて
花に嵐の夕べより
闇路に迷ふなきがらの
かたみの石に苔むしぬ
春くれ夏に入り相の
鐘は淋しくひびくなり
山杜宇血に啼きて
汝を吊ふ聲悲し

鳴くひぐらしや蟬しぐれ
手向の歌をしらべつゝ
血潮吊ふ夕しほの
赤きは汝が心なり
空さわたり馬ひばゆ
秋はきぬれと枯尾花
やせし穂先にやたけ夫か
魂や招かん祭るらん
葉末の露にこうろぎの
音は枯れ〳〵に細りつゝ
くやしとすたく聲ろこれ

去年の迹吊ふ挽歌なれ
更け行く夜半に谷川の
いにしに變る瀬々の音
岩にせかるゝ峰の風
いつれ夢吊ふ挽歌なり
幾つらわたるかりかねや
ゐみしの笛も聞ゆなり
月にましらの啼く聲も
夢の迹吊ふ挽歌なり
タべくの山れろし
蓬生か原は荒れ果てゝ

砧にまろぶ草の露
消ゑて墓なき風情かな
利鎌に似たる月落ちて
名殘の影のいやすごし
誰が魂の火なるらん
野末に燃ゆる二つ三つ
をちにも一つこちもまた
三つ四つ二つろこゝに
鬼火は聽て集ひきて
一つの玉になりにけり
焔は青くすさまじく

暫したゆたひ遊びしが
一つの玉は又こゝに
二つにぐれ分れけり
一つは北の西比利亞を
さしてぞ吹かれ〳〵ゆく
うらみの歯がみきしりつゝ
血煙りたてゝ消へ失せり
一つは生みの日の本の
ふる里さして流れけり
悲しの涙すゝりつゝ
ゆら〳〵風にまたゝきて

今は影たになかりけり
あやめも分かぬやみの夜に
星もかくれて風重く
木の葉の落つる音はかり

おらが秋

『おらが秋』は乙未の年に編みたるものなるがこゝにはその『午の卷』の一部を錄す。

古日記たゞ過去帳の如くにて　（宗因）
三千世界おらが秋風　青岑
旅に寢て夢は枯野をかけ廻る　（芭蕉）

麥を食ふやらわづきを食ふやら　青岑

死ぬまでは生きのばすなり千々の春　（二葉）

結び連ねん朝々のつゆ　青岑

幾度も旅なれ衣たびころも　（古道）

おらが惠方の四方八方　青岑

ミューズを日東の蓬萊に追ひゆきしは三年むかし巳の年の秋なりき。

おらが秋。ちび筆を似而非故郷に負ひ麥を狭霧に食ひたるはいにし午の年の秋なりき。

れらが秋。風露坊にすきなことして日暮し硯を弄びしはことし未の秋なりけり。

過ぎし三年の我が秋はしかくありき、來ん年の我らが秋はいかならん、暫くこし方の反古をさぐらばやや。

おらが秋行くゑに夢の峰青し

甲午の秋、われ脚を病みて半月あまり伊山に靜養しけるが、當初郷なる一人の友に書を寄せていはく。渠も東洋の人種なりき、旅行后おやしげなりし渠の脚部は麥と小豆とを食ふの止むなきに至りぬ、醫は謂へらく轉地療養と家人も謂へらく轉地療養と而して渠も亦謂へらく轉地療養と、かくて此三聲は終に渠を伊山の風色に導きぬ、而も事倉卒にして、御身に告ぐる暇なかりしは渠の遺憾とする所なりき、さわれ病素より豫めすべからず、豫めすべからざるを知りて而して渠は尚曰く一週日の后は御身を見んと、渠とは誰ぞ春秋巷の主人青岑なり。』

これを我が病中幾多の消息の第一便とす、こゝにて數日同じ友に認めて曰く、

韓山の風雲益々見心に相成候折柄、斯る所に隱居候事なか〳〵もとかしく相成候、

野分きつ此秋我を殺すとや。

伊州日記と手帳に鉛筆の覺束なきをとゞめ候ひしより早や四日と相成候今日は如何にして暮すべきかは毎朝床にありての大問題にて候、以て如何に小生が無聊に困するかを推し給ふへく候

秋はなは日暮し硯に赤蜻蛉。

枯枝に伊州なまりの歌哉。

空城に風悲んで霧深し、伊山は小生が生れしところより鄕里と申さば

申すもの、邸宅もなく知己なければ結局小生が緣地には無之候

當地の地勢山にかこまれたると街衢の整然として碁盤的なると家毎並の低くして格子の褐色に塗られたるとは平安城を思はしめ候若それ衣食の大半が京都的たると言語風習の多くが上方風なるとに至ては當地は semi-Kyoto とも評すべく候、小生が居室は八疊の樓上にて下の城濠には一面の蓮葉ひろごりて之に朝來の雨降りそゝぐかしましさは鷄林の彈丸雨飛を連想致すべく小生は低聲背てものせし拙調を吟候、其詞

軍旗蕭々——馬蕭々
踏み破る——戍歡驛
夜は深し——四更の月
月は弓張り——射るさ戰霰

忽ち聞く——霹靂一聲

聲は、敵——敵は清

おのれ何——木葉武者

落さでやは——我が勢に

山々怒り——谷々吼ゆ

屍は丘を——血は川を

高く嘶ゆ——放れ駒

低くうめく——手負ひ卒

煙をかすむ——鐵笛の音

音を合す——鬨の聲

聲は敵か——將た味方

旗風一陣——曉寒し。

いかが御一笑下さるへく候不具。

今やわれ病を他郷に養ふ、在郷の友が一篇の消息は千百の藥石よりも効驗あり、われは一書を得る毎に十數回の反讀をなさゝるはなく又直に返信を認めざるはなし、われは之を返信といひたりしかども寧往信といふの適當なるを信ず、蓋し彼等の我に書を寄するや、我が無聊を慰藉するにありて我が彼等に書を寄するや我が偶感と行動とを報ずるより他になければなり、

面顔のゆるぐが如し雁の聲。

一夜雨收まりて四隣寂たる時、天神の鐘のあはれなるに筆を採りて無

言なりし一友に書を與へていはく無言必しも言なからず、無文必しも文なからんや、便なき君は君の健在を便し、消息なき我は我の療養を消息す、翰を裁せざりし君は翰を裁せざりし我を咎むる勿れ、而して無言なりし我亦無言なりし君を咎めんや、

麥食ひに狹霧に入りぬ渡り鳥、
鹽絶ちの我は野分の枯木哉。

後數日にしてこの友はわが代人としてエマルソンの集を寄せぬ、逆旅客舍に思想界に餓へんとしつる我は彼を透してコンコルドの哲人と談じ無限の快を得るに至れり。

はじめ書を寄せたる友に又翰を通じて曰く

一週日の後は御身を見んといひし我は更に旬日を重ぬに至れり、されどこれを以て我が病篤みしとな思ひ給いそ、そは確なる癒養は漸次のものなればなり

當地の昨今は唯ふりつゞく雨に淋さいはん方なければ

秋の雨蓮にきて鳴く夜寒哉、

たまゝ一陣の風に小晴れするよと見れば例の天神の鐘の折柄聞ゆに

落葉して腸にしむや秋の鐘。

又久米川の迹を吊ひ山溪寺が亡き法主の昔を尋ねたるさまを報じたる言あり、『

見渡す限り一と叢の枯野原浩々と連り、流に音を鳴く瀨の聲のはつかにしよろゝとしたるいとあはれに、露に時雨の色草戰き、風に枯れたる虫の音悲し、幾魂の幽靈今何所にかさまよふらん、ましてやねれ

衣着つゝ果てにし法主の怨の跡、果てぬは年中線香の煙なり、
露の原こぼして忍ぶぬれ衣
墓傾きて文字瘠せ、苔むして色青みたり、狹霧にむせぶ松の木立は嵐
に挽歌を奏で、秋日光寒くして天は沈々たり
秋風や久米川をさする二百年、

ふと顧れば
影寒し追分歌ふ馬士一人、

名殘を惜みて歸りぬ、路に萬福寺に入り伊賀越の川井又五郎が墓を訪ひぬ、墓は一小丘にありて朽ちたる塔婆に蒸す苔深し、土人の此墓を見ると冷き限りなり、よしや彼實惡の敵なりとも討れたる後は信士居士なり寛永のむかしは知らず墳に眠れる又五郎は百日髻に朱鞘の又

五郎ならず、嘗ては物數寄に吊はれたる彼は唾せられけん、われは今この墳に對ひて彼の爲に憐れまずんばあらざるなり。

我が友に漢詩を善くするものあり韓山の旗雲を望みて一種を寄せぬ、われかへして、いはく

栗節句天高く馬肥ゆ唐の秋、
散り葉落ち葉それよそにも木葉武者、
櫓兵衛の武者振そしる鴉かな。

又われに繪畫を善くする一友あり、敢て伊山の自然を問ひければ答へて曰く山より出る日、山に入る日、峰の弓張月、嵐吹く枯野、村雨する鎭守の森、久米川はあはれに、西山はれかしく、城跡はかなしく、天神はゆかし、淋しき落葉の里、靜けき野分の后の月なんど詩料多く

畫材豐なりと而して後數日にして後は一幅の畫を寄せぬ、われ贊して曰く

水酒れて河原の骨に草紅葉。

在郷の他の一友我に書を寄せて頻りに行李を收めんとを勸む、直に返書して曰く

死はわが過去なりき、現在も然り、未來も亦然らん、
逆境はわが過去なりき、現在も然り、未來も亦然らん、
然れども死内豈に生なからんや、逆境内豈に夫れ必しも順境なからんや、

死内の死、逆境内の逆境は過去未だ嘗て我を沒することなかりき、思ふに未來も亦然るべし、而して現在の我が境は抑も如何ぞや、

伊山の峰は我を圍み、伊山の霧は我を包む、然れとも我を圍まざる我を包まざる思想界の何ぞ八疊の裡に横はるを知らざる、こゝには四季なく古今なし、この際涯なき境界に逍遥する我はいかにめでたき限りならずとせんや、而れどもこの境は數日を以て終結を告げんとす、我は歸りて病外の病に生きんよりは寧留りて病内の病に罰されんことを欲するなり、

今や我が傍には中外古今哲人詩人の卷をなしてあるなり、渠等は朝夕我を教へ我を慰め我を導き我を撫す、この境に處する我たるもの、歸郷を欲せざるなり、

病と告げて李白と寢たりおらが秋。

更にまた他の一友に書を寄せたり、いはく、

病人を隕すか、病人を傷くか、病人を破るか、病人を殺すか、曰く然り、然れども人を隕し人を傷け人を破り人を殺すもの豈に獨り病魔のみならんや。

藥隕ちたるを生すか、藥傷きたるを癒すか、藥破れたるを治すか、藥殺されたるを蘇すか、曰く然り、然れども隕ちたるを生かし、傷きたるを癒し、破れたるを治し、殺されたるを蘇すもの豈に獨り藥石のみならんや。

四百四病我を隕すか、四百四病我を傷くか、四百四病我を破るか、四百四病我を殺すか、曰く百千の藥は生かすへし、百千の藥は癒すべし、百千の藥は治すべし、百千の藥は蘇すべきなり、若し夫れ藥なけんか、我は隕ち果んのみ、我は傷き果んのみ、我は破れ果てんのみ、我は殺

され果てんのみ、かくて我が体軀は朽ちん、然れども我心靈は瞑せざるなり。

病外の病我を隕すか病外の病我を傷くか、病外の病我を弱むか、病外の病我を殺すか、曰く百千の境は生かすべし、百千の境は癒すべし、百千の境は治すべし、百千の境は蘇せしむべし、若し夫れ境なけんか、我は隕ち果てんのみ、我は傷き果てんのみ、我は破れ果てんのみ、我は殺され果てんのみ、かくて我が体軀は朽ちん然れども我が心靈は瞑せざるべし。

等しく共に体朽ちて靈瞑せず、然れば一は体自ら朽ち、一は体他より朽ちざる、一は以て賞なり一は以て罰なり、

逆境の我は一昨秋形而上に病み今又形而下に病む、一は我を破り一は

我を殺す、彼は我をして益々逆境に導き是は我をして益々病魔に近づけたり、然れども秀麗の山水は幸に我に恩惠を與へて境と藥とを供せり。

一藥、藥、我を呑み、二藥、藥、藥を飲み、三藥、我、藥を飲む、
一境、我、境を容れ、二境、境、境を容れ、三境、境、我を容る、

かくて内外に病みたる我は相反せる經過を以て日一日漸癒に赴き、新なる生命に浴せり。

ろれ然り、而して我が郷に復して三更萬籟死する時我臥床に心目をすゝぐの夜は正に數日ならんとす。

これを我が養痾消息の最後の書とす、書き了りて顧み獨り吟して曰く

裏枯やかれ〳〵淋し藻鹽草。

鉄笛曲

海ゆかは　みつく屍
山ゆかは　草むす屍
いざみせん　やまと魂

砕け散れ　彈丸の時雨
何あらん　これしきの手負
來れ寄せ　つるぎの林
肉もはじけ　血も湧けがし
七たびの　生を期せし
ためしごと　昔ありしを

ひざ見せん　やまと魂

吹きまくれ　八道の草
わが奏ぶ　鐵笛の音に
斬らずやは　不義の冠
わが佩きし　太刀の霜

ひざ進め　やまとたけらを
音ぞ亂れ　曲は進軍
進軍進軍　曲は進軍
またいく間　煙うろぶき

はかなくも　飛び來ふたま
怨めしや　おのれ辮髪

ひざ進め　われも進まん
われもわれも　くゝロ惜しや
得ころ起たれぬ　又艷れしか
進め進め　音こそ亂るれ
進軍進軍　曲は進軍
奏べてん　曲つゞけてん
音なやめぞ　息なきらしぞ
たのれ陷さずば　我も隕ちまじ

れのれ拔かずば　我も死なまじ
進め進め　音こそ亂るれ
進軍進軍　曲は進軍
進軍進軍　進軍進軍

勇魂の　夢の跡
血枯れて　秋さむし
いたわしや　鐵笛の士
勇ましや　鐵笛の士

パレットとペン

花は盛りに月は隈なきを見るものかは、而り烟波縹渺花疎なる所、三更弦月を蹈で寒潭を逍遙するものにして始めて花月を談ずべきなり、酣酔は微醉に如かず、爛熳は蕭條に如かず、大巧は大拙に如かず、極好は風流に如かざるものあるは、豈に此類ならずとせんや、而して吾人が藝術に於ける好尚の時に之に比すべきものあるも、實に濃の淡に如かざるを以ての故にあらずや。

更に轉じて之を想實といひ之を餘情といふ、夕陽西に沒して漁村の孤松鬚げに紅なる所、以て天日を想ふべしとせば、詩歌に色彩を描き、繪畫に聲音を寫すもの豈に空しからんや、この時詩畫相去る僅に一歩にして、有聲の畫有彩の詩は時間と空間とを擺せしめたりといふべし。』

更に吾人をして一歩を左せしめよ、而して餘情が如何に詩歌の生命に

して此生命の病的作用が如何ばかり詩を疵け歌を傷ふに至りしかを見よ、古來幾多の詩人が此悲痛の胃ところとなりて其發表を失敗し畸形の詩篇を後代に遺したるや、實に恨の深きもの少しとせざるなり、繪畫に於けるも亦然り、不自然なる景物の配置と雜駁なる風物の選擇とが如何に一幅の小天地をして悔に堪ねざるものたらしめしぞ。

結構の泡影露電に類したるもの、京童之を夢幻劇と罵り、詩想の散漫にして錯辭の夢幻なるもの之を朦朧体と罵る、而して詩の病的餘情はこの朦朧を現ずる一因なりとすれば餘情の法又容易のものならんや。

更に吾人をして數歩を右せしめよ、而して厚の薄に如かず密の疎に如かざるものあるを畫と文とに求めんか、余はこゝにスケッチと隨筆とを擧げんとす。

例外は規則を證明し、無言は有言を表明す、凡そ事物の眞相を知らんとするもの、之を正面より窺ふの巧は之を裏面と側面とより窺ふの拙なるに如かざるなり、これ吾人が一點一線の末を苟もしたるスケッチに於て畫工が滿腔の精神を窺ひ、一辭一句の微を漫にしたる隨筆に於て文士が生平の人格を窺ふ所以ならずとせんや。

レッシング曰く人若し眞に美ならば粉飾せざる時に最も美なりと、豈啻に人の美なるのみならんや、吾人は其粉飾せざる時に於て又實に人の眞の眞、本然の本然を窺ふを得るなり、スケッチの飄逸にして高雅なるや、吾人はこの粉飾を施さざる未製品に於て直に畫工と對するの感を起し、隨筆の優健にして眞率なるや、吾人はこの一貫せざる斷篇零章に於て直に文士と談ずるの感を禁ずる能はざるなり。

兼好は如何なる人物ぞ、吾人は渠が遺せし幾百の和歌に於て渠を解するを得るなり、然れどもその物狂はしき日ぐらしの硯の徒然草が渠の本領を吾人に談るの深きと孰れぞや、芭蕉は如何なる人物ぞ、吾人は渠が詠せし無數の俳句に於て渠を描くこと難きにあらざるなり、然れどもその隨時隨處に認めし不用意の書簡が渠の眞相を吾人に告ぐるの切なると孰れぞや、吾人は敢て之を不用意といふ、然り用意の意は不用意の意の率直なるに比すべきにあらざるや、吾人は往々不用意の間に於て、無量の言説を泄らすことあるなり。

シルレン嘗て嗜好と才能との一致せざるを説きて曰く嗜好は力を恐れ才能は箝制を賤むと、果して然らんか、吾人は力を恐れざる嗜好と箝制を賤まざる才量とが不思議の調和をなせしもの唯このスケッチと隨筆とに見るを得べしといふべきなり。

我が臥床

『寒ければ寢られず寢れば尙寒し』。肌のさむさは腦を激して臥床の我に安眠を與へず、萬感蝟集して獨り枕頭に筆を採り自ら床に告げ且つ問ふて深更に至る。（廿五年）

嗟呼青苔子汝妄りに好遇を弄ひしより天は汝を陷しぬ、秋風一陣、月は空しく配所に傾きし爾來、明窓明ならず、淨几淨ならず、白日の光は汝を育すに足らず、夜光の燈は汝を照らすに足らず、汝は白日と夜光との以外に別天地を開くの止むなきを感じぬ、而して汝の臥床は即ちこれ！

嗚呼臥床、汝はわが誕生を迎へ、又わが生を蘇せしめき、何時かは又わが終逝を送らんか、われ病めば汝はわれを撫し、われ癒すれば汝はわれを撫す、わが過去の涙は汝の拭ふところとなり、未來の夢は汝の抱養によらざるはなきなり、今やわれ誤て境を逆にす、而して逆境のわれは筆を茲にとり書を此所に繙く、信を通じて鄉黨と談ずるも信を得て遊子と語するも亦此處なり、詩を讀みて仙境に遊ぶも史を閲して百世に溯るも亦實に此處なり、若し文字を以て心思の聲音とすればわが有ゆる心思の聲音は一に汝の與ふるところといふべきなり。

嗚呼わが臥床、汝はわが乾坤なり、過去然り、現在然り、未來亦然らざらんや、連宵、更深くして燈滅し萬籟寂たる時、幽冥我を包み闇黑

われを擁す、時に高又低、急又遲、枕頭時器の聲調は我を奪ふが如く嘲るが如し、聲調我を奪ふか、我聲調を奪ふか、外界我を弄すか、我外界を弄すか、我醒か睡か、世醒か睡か、我は有無の鄉に逍遙す、嗚呼臥床憫むべし、汝は我を包めども我が靈は汝にあらず、汝は我を守れども我は出でゝ思想界に彷徨すなり。

思想界、ア、試に歩を此處にまげよ、而して進め、而して又進め、而して又々進め、而して尙又進め、而して尙且つ進め、而して更に進め、其境や廣大實に無邊なり、汝若し小丘に至らず登て四顧し以て身に問ひ世に問ふべく、清泉に至らず跪て八眸し以て生に問ひ死に問ふべし、思想豈に夫れ夢ならんや、而して此快を與ふるものはわが臥床！

良心と道德

道德を律するもの果して如何、昔者哲人吾人に敎へて曰く宜しく左すべし敢て右すべからず、甲は行ふべく乙は行ふべからずと、其說く所千百、一に外部的の法則ならざるはなし、然れども是等の法則は到底互に衝突するを免かれざるのみならず、斯くして律せられたる道德は時に破壞と腐敗とを招かざるは稀れなり、この欠点を充實し健全なる德性を樹立せんとして道德的判斷の標準を他に求め法則を內面的とするものあり、之れ良心を以て究竟無上の權威(オウソリテー)とするものにして倫理學者の所謂直覺敎これなり、其說に曰く善惡は外部の標準によるとなく吾人が直に之を覺知するものにして道德の第一義は實に良心の命に從ふにありと、論者又曰く良心の作用は直覺的にして推理の過程が其結

果に達するにあらず、曰く良心は根本的にして之よりも更に單純なる元子に分解し得られず、曰く良心は普遍的にして凡ての人種凡ての時代に存すと、泰西の直覺論者が以て說き東洋の多くの儒者が以て唱する所概ね是なり。

健全なる道德を律するもの果して良心乎、先づ吾人をして所謂良心の要素と性狀とを攻究せしめよ、蓋し思ふに良心には三種の方面あり、其一は知的作用にして義務を認知し善惡正邪を判斷するものこれなり、然れども此判斷は論理的に非ずして裁判的なり、即ち事實の判斷(judgment of facts)に非ずして事實に對する判斷(judgment upon facts)なるは記憶せざるべからざるなり、次に良心は情的原素あり、即ち吾人か義務を認知すれば之と同時に拘束の感情を起し、善惡を識別すれば

之と同時に愛憎の念を生ずるもの是なり、最後に良心は意的分子を含有す、即ち義務を認知し正邪を識別すれば從て義務を果して拘束の情を脱し以て正善に就かんとの努力あるものこれなり。

是等三個の要素が如何なる狀態に於て吾人が行爲の判斷を律するかを見るときは吾人は良心を以て究竟的の標準とするは甚だ覺束なきものなるを發見するなり。

蓋し良心の知情意三要素が互に調和し平衡し、一事の知的賞贊若くは責罰が之に適當なる感情と意思とを隨伴する間は良心は良好なる道德的判斷の一能力なりといふべし、然も事實はこれに反するもの一再にあらずして三要素が互に衝突し撞着するものあるは抑も此要素中何れに就きて斷ずべきかを知らざるなり、蓋し感情を保守的分子なり、そ

が革命的分子の理性に伴ひ得ざるは固より當然なり而も良心論者にして是等要素の孰れか一か至大の權威を有し吾人は其命に從ふと答へんか吾人は三者中一を選びしものは何者ぞと反問せんとす、而してこれ道德を決定するに法則を去て目的の途に就きしものにあらずして何ぞや、即ち道德的判斷の標準に良心を棄てゝ理想を採りしものにあらずして何ぞや、

假りに今吾人をして良心の三要素が常に平衡を保つものとせんか、而も吾人は良心の判斷が相對的にして絶對的ならざる、到底完全なる判者ならざるを公言せんとす、蓋し其以て正とし邪とし善とし惡とするものは所謂 Middle axioms の一連に過ぎずして更に之を統一すべき第一位の原義を求めざるよりは良心が要求する道德は時と所とに應じて轉

變し矛盾するの不都合を生ずべきなり、而して此第一位の原義を探求するものは良心に非ずして理想ならずや。

先きに吾人は良心說が道德判斷の外部的法則に對立して起りたるを一言したり、然れども其法則の權威に關して之を良心とすれば果して外部的を去て內面的のものたらしめ得たりしか、甚だ疑はしきを感ずるなり、蓋し彼の良心を說くもの、之を以て自己の動作を判斷する有權的自我 organical self とはなさずして、人間意識の他の部分を離れて獨立せる特種の一能力とせり、然れども今日の心理哲學は斯かる一能力の孤立を許さゞるを奈何にせん。

次に吾人は又直覺說の欠点として一言すべきは其唱道する道德が個人的に陷りて社會的ならざると、及び其道德に對する見解が道德を以て

萬古不易にして古往今來毫も進步せざるものとなすとこれなり、これ良心を以て發足点とし又終局点としたる東洋の道德が保守的にして社交的ならざりし所以にあらずや。

斯くて學說として吾人は直覺說の不完全なるを知り得たりと雖も實踐倫理に於て世人が日常行爲の判斷が果して那邊にあるかを一考すれば其の未だ必しも排すべきにあらずして世道人心の大半が之によりて敎化せられしもの尠少にあらざるを見るなり、是に於てか良心の敎養を說く者あり、曰く知情意の三者が各々種々の經驗敎育境遇等によりて變更を受くるが如く良心も亦是等のものにして修養し以て圓滿なるものに致すべきなりと、然り吾人は之を敎練すべき必要と能事とを知るなり、然も吾人は良心が如何程修養せられたりとも其作用が尊消極的

過去的保守的の傾向を有せるは斷言するを憚らざるなり。

何を以て之をいふか、吾人は多くの直覺論者が良心を以て知力の一方面に重きを置き、或はベンサム、ミル、スペンサー、シャフトベリー等が情的の一方面に重きを置き、或はカントが意的の一方面に重きを置くは不十分にして三要素が圓融同体たるものと解するの頗る穩當なるを知ると雖も此三要素の中に於て良心をして良心たらしむる最も顯著のものは果して何に存するかを見れば其感情的方面なるを知るなり

ビュームの如きは此情的要素のみを以て良心の全部と解したるさへあり、而して此情的方面には豫想的のものと回顧的のものとあり、拘束の情の伴生するは前者にして悔恨の情の伴生するは後者なり、而して吾人が是等の情を惹起するは行爲の正善なるときよりも邪惡のときに

多く未來の行爲に生ずるよりも過去の行爲に生ずるを強しとす、良心の聲が吾人に告ぐるに『斯く行ふべし』といふは『斯る事は行はざれ』と命ずるの切なるに如かず『來者には爾かせざらん』といふ『は既往には爾かしたりき噫』と嘆ずるの強きに如かざるなり、これ良心は行爲を積極的に嚮導するよりは寧消極的に警戒するものといふ所以にして吾人が進歩的道德を良心に望み得ざる所ならずや。

四季二十句

春

客を送る我門前や春の月
橋上や我に誰何ず朧月
藤棚に掛茶屋低き暖簾かな
引鶴の松を離るゝ朝日かな
踏青の月に唄ひて歸りけり

夏

斬られしは夢なりし夏の夜明方
蚊屋つりて舟に寢て居る月夜かな
生馬の眼をぬく江戸の松魚かな

移し植ゑて大きく開く牡丹かな
卓上の聖書に薔薇の香りけり

秋

黄菊折れは白菊殘る籬かな
色鳥の夕日に入るや森の中
秋の日の照りそこなうて暮れにけり
秋の日の海に沈みて雲赤し
鶏頭も芭蕉も雨にうたれけり

冬

葱の香より胡椒の辛き鼻を突く
人は馬は時雨るゝ橋の央かな

庭廣く寺子興ずる霞かな
更に赤き凌雲閣や江戸の雪
行年の俤につめる蜜柑かな

小天地

◎月夜

圓かなるもよし。上弦の月は尚ほ盈つるに望あれば、此れを陰中の陽とも云ふべくや、されば下弦の月愈々細くして美人の眉の如く、薄き雲の斷間を縫ふて傾きつゝ嶺て西山に落つるの時、物淋しさの限りは、陰中の陰とも云ふべし。一度は袖に鶯の盛りも見たらんがし、花散りての今は身も衰れ果てゝ光澤なき顏に年波の寄るに付けても氣恥かし

や、もとは馴れ合の今の夫、我れと連れ彈の紙子妻も昨日の伽羅の名殘と見れば自づと袖に露も宿るぞかし、有道に平常は思ひあきらめたる身も、月哀れに澄み渡り彈く三味の音霜に冴へては、我から唄ふ歌の文句も何となく身につまされて、聲も何時しか濡り勝ちに、高き調子の沈み行くも是非なきの身やと、夫婦が思はず顏を見合す時、月は空しく山に落ちぬ。

寒彈の小さき嚔も聞こゆけり　舟霧

◎菊　籬

花は、くさ〳〵の秋草を先き立でゝ、操を霜に苦らみつゝ哀れげに籬に咲ける花一輪、華やかならねど清く尊げに澄ましたるひと心惡くし。明星天に懸りて暮鐘水に流るゝ時、獨り籬の下に佇づめるは今は亡き

夫を日々苦慕す墓に音訪れ、緑の黒髪を浮世の絆と共に切り捨てたる未だ年若き寡婦の夫れなり、三更月は澄んで軒にこがらしの耳やく時、専念の讀經に一點の塵をも許さず、念珠を左手に、右手に形見の可愛げなる兒の手を引きつゝ、浮世の浪に潮の荒るゝ事なく、夢は昨日の圓かなるを思はぬに有らねど、月に對して欠けたるを恨まず、清き操を天に誓ひつゝ、唯だ頑是なきものを杖柱の、淋しき今日を慰むる菊や、彼女の異身なりかし。

此菊を折るに付けても夫の事

無禪

◎虫聲

亡き母上の御あと慕はしや。妾は繼しき今の母上に心の丈けは盡くせど、尚は胸に狹霧の、屆ぬは足らはぬ身の、因果の程の恨めしや。一

世の契とは云へ親と呼び子と呼ばるゝは淺からぬ緣の糸の結ばれしものを、前の世は敵同士の廻る因果の今の我が身に報ひしにや、死する妾に厭ひはなけれど、無からん後は妾を子ぞと思し召す父上の嘸嘆かせ給はん、不幸の罪は死しての後も六道の辻とやらにて、迷ひの種なるべしと獨語ちつゝ、堤の上をとぼ〳〵と辿り行くは、未だほころばぬ苔の雪に苦しめられて、此のまゝ果つべき哀れの身にこそ。折柄月は千本杭の彼方に銀蛇を跳らし、霜は薄く葉末にしきて、橋下の虫聲唯だ喞々として天になく。

星隕つる向ひの岸に虫の聲

◎納涼船

『ホラ捕つたよ……、マ小梅ちやん、御覽ッてたら、こんなに大きい

んだもの。』

舳の方に立つて居た可愛らしいのが、屋形の中を覗き込んで今捕つた螢を大切相に姉さん株の小梅に示した、罪の無い螢は摘まれ乍らにピカリ〳〵と光つて居る。

『何だね、君ちやんは何時まで娘子なんだろう……。サろんな螢なんか捨てッちまつて、少と船中で且那の御酌でもするんだよ。』

棹さゝぬ船の流れのまに〳〵銀波を碎きつゝ漂つて居る、船中からは絶へず黄色い聲と笑ひのどよめきとが水上を亘つて、愉快は此船に集められて居る。

此方の岸には、鬚蓬蓬々として眼の色さへうるんだ四十恰好の男が、しきりに船の中を覗き込みつゝ、佇立して居る、滿身の塵垢を蔽ふに數

片の襤褸を以てするの哀れの樣で！、少時して彼れは獨語した。

『やッぱり我們の氣の迷ひかしら。』

すゞみにも編笠深し壬生浪士　　無禪

天才

"Die so häufig bemerkte trübe Stimmung hochbegabter Geister hat ihr Sinnbild am Montblanc, dessen Gipfel meistens bewölkt ist, aber wann bisweilen, Zumal fvh Morgens, der Wolkenschleier reisst und nun der Berg vom Sonnenlichte roth, aus seiner Himmelschöne über den Wolken, auf chamouni herabsieht, dann ist es ein Anblick, bei wel-

chem Iedem das Herz im tiefsten Grunde aufgeht."

ショッペンハウエルは天才に付て此く述べたりき、夫れ天才の一度機を得て爛々たる光輝を放つに當りてや、其偉觀實に巍峩たるモンブランの絶頂の遇ま雲翳を脱して朝暾の輝々たるに其秀姿を現はすが如く、愛に始めて世人は深く其美觀に打たるべきなり、然れども峻嶺は多く雲に包まるゝものなり、千里の駿馬も空しく塵埃の裡に埋もるゝ時は終に駑馬と同じく其生を終らんのみ、夫れ天才は得難し、而かも尙ほ其天才を塞閉する密雲を除くに至りては愈々困難なるべきを見る。

天才とは如何なるものを云ふか、常人よりは鋭き感覺と純潔なる智を有する者を云ふ、一の鳥あり中空を南より北に亘る、常人は唯此の自然を望んで茫乎たるのみ、而かも天才は一羽の鳥の飛翔に對しても其

の感は湧き其の血は熱す、是に於てか此より彼れを想ひ彼れより此れを攬り、諸種の想像は彼れが頭腦中に描かれ壓すべからざる詩想は彼れが胸を焦す、畢竟するに彼れは外部の刺擊に對して非凡の感に打たるゝ多血多涙なる一種の病者たらざるを得ず。

天才は多血なり、從つて生理上多血其に對する丈けの大なる頭惱を持たざるべからず、若し頭腦大なるを得ざれば彼れは一種の狂者、心經病者として終るべきなり、是れ或点に於て天才の狂者に類似する所以たらずはあらず。

一時我文壇に天才を呼ぶの聲頻りなりき、然れども似而非天才は知らず眞の天才は根元的に其質を異にす、呼んで而して求むべきに非ず求めて而して得べきに非ず、唯天が戯れに造り出せし一種變性の怪物な

り、故に世俗一般の風潮に從ふて社會に立つ能はず、彼等の俗勢に從ふや常に窮困して唯だ無爲碌々其生を終るべきのみ。

夫れ零落と曰ひ窮乏と曰ふが如き單なる物質的の欠乏は、直ちに精神的に天才を傷ふものに非ざれども、世と背馳する彼れは其滿足を求むるの機なく、其愛を慰むるの友なく、宛然孤嶋に獨栖するが如き其境遇は何時しか彼れを導きて厭世に陷らしむるに至るは又自然の勢なり、

アリストートル既に此事を說きて Omnes ingeniosos melancholicos esse. 凡ての天才は憂鬱なりと曰ひ、ゲーテは又 "Darum behagt allem Die Intergenie das Element der Melancholie." と曰へり。

天才は靜止たる能はずとは古哲も屢々言ひし所にして、激し易き感を持てる彼れは一瞬も心裡虛無なる事能はず、從つて其血は常に熱し其

神は常に狂し、同情の涙と赤誠の血は時に溢れて一大雄篇となり、美妙なる詩文となる、然れども其雄篇や其詩文や、多くは其當時世の注意を惹く能はずして、後世一二知己の此れを世に鼓吹するありて、此所に漸く彼れ有るを知る事多し、顧れば天才其者の不幸又憫れむべき哉。

樂天厭世及び酒脫

人は同一の現象に對して三個の觀察點を有す、即ち一は唯だ茫然として樂しみ漠然として喜こび、自己に一定の見なくして物に付きて光明の一面をのみ望み、一は自己の情思既に悲哀に傾き、眼に入るもの耳に聞くもの悉く取つて以て憂鬱の材となす、此二者共に自己を主とし

たる觀察に過ぎず、然れども第三者に至りては全く前二者と異なり、自己を客觀の地位に置き高く白雲の上より下宇宙を望むの慨あるものにして、所謂 洒脫（ヒュウモリスチック） の地位に達したるものなり、されば樂みも彼れの心を乱すを得ず、悲しみも彼れの情を犯す能はず、常に萬般の現象以外に超然として中心おのづから優々たる所ありて、迫らず苦しめられず、身を宇宙と人間とに批評者の地位に置くものを云ふ。

等しく水流の洋々たるを見るに當りても、一は唯だ其流るゝ水の面白く且つ美はしきを見て樂しみ、一はうたかたの水沫且つ消え且つ結ぶを想ひ、一はその消え結びするも河流は滔々として常に流るゝを感ず、一所謂樂天家の麓にありて遠く山嶽の巍峩たるを樂しみつゝ喜こびつゝ觀察するに反し、厭世家は自ら巖を攀ぢ險山難岳に登るの苦痛を感じ、洒脫の境に達したるものは一度其絶頂を超過して後麓に歸り再び其山巔を顧望するの慨を有するものなり、余嘗て此れを聞く、昔時弘法大師歸朝して後其堂宇を建設するに適したる地を相せんと欲し諸國を歷遊する事數歲、漸くにして高野山の其の求むる所に合するを視て、即ち此所に堂宇を建立せりと、蓋し彼れが望みし所のものは一度山巔を越ゆるに非ざれば達し得ざる山腹の平地にありしと、此れ一種の傳說的小話に過ぎずと雖も尙一面の眞理を含蓄せずとなさず、夫れ人の世に有る猥りに悲しみ徒らに憂ふるが如きは未だ以て其極所に達せしものと云ふべからず、一度此の厭世の境に陷り再び之を脫して洒落脫俗の妙境に至りて、初めて人間は完全なるを得べきなり。

此の如くにして樂天と洒脫とは共に世を厭ひ物を悲しまざるの点に於

て多くの類似を有す、故に此両者を等しく樂天なる範圍の中に入れて說く人亦少なからず、即はち英のサリー氏の如きは洒脫を以て有理的樂天(チミズム)と曰ひ、樂天を以て沒理的樂天(アンリーソンド・チアナミズム)と云ふ、蓋し一語にして能く両者の意味する所のものを表示せしと云ふを得べし。

此れを一般の人の上に付て觀察する時は、或は慨して終生を樂天の境に送るもあるべく、或は厭世を以て其身を終るもあるべく、或は時に又洒脫の妙境に達するもあるべし、此を例ふるれば佛說に所謂煩惱凡夫の俗輩は、今日の榮ありて明日の枯あるを悟らず、有爲轉變の情況に接して猶ほ泄乎として處世の道にのみ汲々とし、物質的の充實を以つて嬉喜するの愚を爲すものなれば、此れ所謂樂天的の生涯を送くるものと云はざるべからず、次に現世の榮枯盛衰當ならざるを見、人生

を夢幻の如く感じ、此れを厭ひ專ら私利私慾の念を壓して來世の安慰を求めんとする、小乘教界の內にある人は此れ即ち終生を厭世の間に送る者と云はざるべからず、而かも現世の無常を悟り、榮枯を浮雲の如く感じ、爲めに世を厭ふの念を生ずるは尙ほ世に執着の念を一つ能はず、自己を客觀の地位に置く能はざるに出づるなり、今や一步を此境より進めて大乘の妙域に達せば、所謂洒脫の脫点に進みし者にして、心中主我の情思を交へざるが爲めに、私利私慾を壓するの煩なく、思ふ所欲する所悉く教義の眞諦に達す、則身成佛とは即ち此れを云ふ、彼の一休和尙の如き實に我國に於ける洒脫の模型たるを得るものなり。

次に個人の生涯に付て觀察する時は、又其思想の上に此三個の段階を

經過するの傾わるを感ずべし、人類は一般に幼時に於ては放肆なるものなり、道德の制裁を顧みず社會の羈束を受けず、我が欲する所に動き其欲せざる所に避く、唯だ現狀に滿足して過去を想はず將來を慮らず、空しく樂しみ空しく喜こぶ、此れ即ち樂天の境に嬉遊する時期にして、人をして幼年の回想は人生に密を與ふるものなりと絶叫するものすらあるに至りし所以なり、人一度此の域を脫するに至れば忽ち厭世の悲境に沈淪するを常とす、此時期に至りては道德及び社會の制裁は悉く彼れが身邊に蝟集し、加ふに希望及び抱負の念は彼れが胸中を焦し盡さんとするに至る、而して希望及び抱負の失敗は直ちに化して厭世に彼れを導くものなり、失意失戀落膽不平は實に此間に起り來るものにして、此等の者壯年時代の人類を悉く厭世の渦中に沒するに

至る、然れども漸く頭髮霜を頂き顏に年波の避くべからざるに至てや、前途に希望あるなく心事自から優々となり、三杯の粗酒に淘然として浮世を忘れ、孫兒の頭髮を撫して此れと嬉喜談笑するに至る、吾人は此、を指して人生洒脫に近き時期なりと云ふ。

聖智釋尊の如きも猶ほ此人生の三階級を踏みしに非ずや、彼れは其年少氣英なる時に於て現世の無常を感じ、泡沫夢幻の濁世を捨てゝ衆生濟度の方便を究めんと欲し、其富貴を捨て其愛妻を捨て、以て山間幽靜の地に清泉を掬し樹果を摘み、而して先づ其心裡に感得せし所のものは小乘の厭世觀に非ずや、後年を積み月を重ね、工夫巧究の効を經て年漸く老ゆるに至り、彼れが唱導せし所のものは實に大乘の妙に非ずや、爰に於てか吾人が一般人類の思想の變遷を此三階段に分つ所

以のもの又理なしとせんや。

今や翻つて此思想の三階級間に於ける人間の事業に付て觀察せんに、樂天時は無爲の時代なり、又素養の時代なり、春風漸く枯枝を促がして萠芽樹梢を飾らんとするが如し、厭世時は發表の時代にして且つ動作の時代なり、多くの事業は此間に形成せられ、多くの失敗は此間になる、洒脫の時期に於ては既に自ら事業をなす能はずと雖も、他をして失敗の苦より免かれしむを得せしむ、故に余は此の時期を呼ぶに統御の時代と曰はんとす、此れを例ふれば一の風呂敷の如く、中に諸種の品物を包括して能く此れを保持するに足る、今假りに厭世時にある人を以て諸人の上に立たしめ此れを統べしめんか、例へば針ある風呂敷の如くにして內に包まれたる諸物を害する事甚だしからん、彼の大勳

位伊藤侯が個人として品性に缺くる点少なからざるに係はらず、猶我國政界の一方に覇を稱し、多數の政客亦彼れが膝下に伏する所以のもの又此理由に負ふ所少しとせざるなり。

獨のハルトマンは審美學の上より此問題を說明して頗る面白き見解を立てたり、今や余は此漫言の間に於て嚴正なる審美論の範圍に迄侵し入りて此問題を決せんとにはあらざれども、一言比喩的評論を試みんと欲す、其れ審美上所謂美は此間の樂天及び洒脫に對照するものと曰ふを得べく、厭世は所謂崇高に相當すべき者なり、彼の怒濤奇巖に激し水泡龍虎を鬪すが如き『サブライム』は、即ち年少の抱負天に沖するの慨あるに當るものにして、一種の厭世的外觀を有す、之れに反して朝暾櫻花に映じ彩霞淫間を縫ふの美は、即ち此れ樂天洒脫の思想に相

當ずるものにあらずや。

此の三思想を世界歴史の上に見るに又面白き現象なきに非ず、其太古蒙昧の時代にして神話的事迹を有する間は、明かに『コメヂック』の期間にして、一般民族は樂天的なりしを知るを得べく、中世基督教の勃興となり東洋に於ける波羅門及び佛教の最盛時に達し、社會は漸次樂天の　より移りし厭世の域に進めり、而して近世に於てルーラルガ『ヒューモリスチック』の思想より湧出せし新教の公布と共に、社會は漸次洒脫の域に近づかんとし、厭世的宗教の漸次其勢力を減殺さるゝが如きは、又著しき例證に非ずや。

此れを現時我國演藝の上に見るに、彼の關西地方に行はるゝ俄狂言を初め、能狂言、其他劇中の所作事及び手踊りの類は最も幼稚なるものにして、畢竟するに『コメヂック』の範圍に入るべきものなり、從つて其觀客は幼者に非ざれば思想の幼稚なる細民、若くは老者の自已が思想に適したる洒脫のものを見るを得ざるが爲め、比較的類似の性質を帶べる此類の演藝を好む事多きが如し、次に一般の劇に對しては其舊演劇たると新演劇たるとを問はず、共に『トラゲヂック』の範圍に屬する者多し、此れ年少男女の自已の思想と境遇とに最も類似したるものなるを以て好んで此れを見る所以なり、獨り此間に立ちて一種の異彩を放つ者を市川團州の演藝とす、彼れが其得意の勸進帳を演ずるに當りてや、觀客をして悲喜の情を起さしむると曰はんよりは寧ろ一種の違大なるに打たるゝの感なき能はず、此れ彼れが既に悲曲の地位より一歩を進めて洒脫の境内に其手腕を奮ふによるに非ずや、此点に於て

余輩は圖州と露伴とを以て我美術界の二異觀となす。

今や本論の大半を終るに際し少しく現時の文壇に關して述ぶる所あらんとす、現時の文壇に於て樂天的詩人を求めんとせば唯一巖谷漣山人を推さゞるべからず、山人の詩想や其文才や既に世評の存するあり、余輩は此れに對して兎角の批判を試みんとするに非ず、唯だ其作品の性質が樂天的なりと曰ひ置かんのみ、次に厭世的作家即ち悲曲的詩人に至りては、其巧拙の差異ころあれ、現代作家の殆んど凡ては此種に屬す、此れ作家の年配及び其境遇が自然に悲曲をものするに適する爲にして、又其詩を讀む者の大部分も此厭世的時期に有る者多きを以て、比較的此等の詩人の作品が世に歡迎さるゝ所以にして、又同時に此種の詩人を最も多く要する所以なり。

一時我文壇に戀愛小說を避けよと呼ぶの聲頻りなりき、此時に際して批評に多く耳を傾くるの作家は、昨の戀愛小說を捨てゝ或は滑稽小說に或は怪奇小說に、其他種々の方面に向つて其作品を試みんとしたりしが遂に悉く失敗に歸したり。

夫れ戀愛は多くの場合に於て悲曲なり、悲曲ならざる戀愛は又殆んど詩の材たるに適せざるなり、而して所謂悲曲的詩歌の大部分は此戀愛の源泉より流れ出づるものならざるべからず、沙翁も曰へりし如く實に戀愛は盲目なり、盲目なるが故に常に能く世と衝突し德義と矛盾す、此の矛盾衝突は即ち聽て悲曲の材をなすものなり、現代作家は其年齡と其境遇とに於て多くは厭世時に有るものなる事は前既に述べたるが如し、從つて其詩歌も悲曲的のものに於て比較的成功を見るべきなり、

是に於てか余輩は現世詩人の作品に戀愛的のものゝ多きを怪しまざると共に、愈々進んで其戀愛の神聖を說き其方面に於て成功せん事を希望するものなり、彼の徒らに世の風潮に迷はされ批評家の駄言に聞き、其得意を捨てゝ不得意の域に移るが如きは、余輩の斷じて取らざる所なり。

余は好んで一葉女史の遺著を愛讀するの一人なり、而も其の作品の多くが戀愛的悲曲なるを見る毎に、余は其人を髣髴せざるを得ず、女性は愛によりて立つ者なりとは動かすべからざるの眞意を含むもの、殊に年少女性に於て其最も甚しきを見る、宜なり彼れが此種の作品に於て成功の域に達せし事や、余は此等の点に於て益々年少作家に厭世的殊に戀愛的詩歌をものするを進めんと欲するものなり。

此く述べ來ると雖も余は厭世的詩歌を以て其の上乘となすものに非ず唯だ作家は其最も得意なる方面に進まざるべからざるを意味するに過ぎず、詩歌に於ても其最も圓滿にして且つ上乘なるものは酒脫の域に到達したるものならざるべからず、余は現代の詩人中此種の作品を爲し得と考ふるものは唯一露伴子のみなりとす、彼れが從來の作品多くは厭世の臭味を脫して、將さに一歩を酒脫の域に踏み入れんとする者、而かも彼れが作品の他の作家の作品に比して多く讀者を有せざるの理、讀者其者の如何なる性質のものなるやを考察する時は、蓋し自から釋然たるものあらん。

此れを古代の文學に見るに、何れの國何れの時代を問はず、其最も多きは厭世的のものにして、其最も少なきは酒脫的のものなり、我國に

て厭世詩人の標本とも見るべきは最も多く、殊に鴨長明、桑好法師を始め、芭蕉一派に屬する俳人、殆んど凡ての歌人、及び戯曲家として の近松門左衛門等其著しきものなり、此を外にしてはバイロン、ハイネ、ウヲルズウオルス、ショッペンハウエル、及びシルレル、等枚擧に遑あらず、而かも洒脫の妙境に達せしもの我國に於ては殆んど之を見出さず、强て此れを求むれば俳人蕪村の如きか、此れを外に求めばゲーテ、シエクスピヤー、ホーマー等は好個の模型ならむ、世の一般に認めて滑稽詩人となす者は、多くは此れ樂天の域を脫せざるものなり。

哲學と美術

哲學と稱し美術といふ、其根本に於て既に實利を離れ私慾の念を脫却

して初めて能く其堂奥を窺ふを得べし、詩を以て衣食の用に充て哲理を唱導して名利を得んと曰ふが如きは、既に其根底に於て大なる矛盾と衝突を意味す、然れども哲學者も食はざるべからず、美術家も衣せざるべからず、社會の一員として立つ彼れ等は其生命の有らん限り常に社會的苦痛を免かるゝ能はず、然れども此れが爲めに遂に純智の明を遮斷せられ、意思の覇束を脫する能はざるに至れば、既に彼等は其天職を捨てし者と云はざるべからず。

哲學者及び美術家は其智常に意思の役を免れざるべからず、此の如くにして後初めて自己を離れたる客觀的目的の爲めに認識行動するを得べきなり、而も世には世才に長け交際に巧みにして俗事に於て成功すべき機能を有する詩人の少なからざるに非ず、夫れ眞に若し此の如く

なるを得とすれば、一器にして殿上の粧飾と貧家の食器とに兼用せらるゝもの、如くにして重寶實に此上もなかるべし、今日所謂文士哲學家の輩中此種重寶の人才多きを見る。

然れども退いて考ふるに私利私慾を營み功名富貴を望む者は、其智常に意思の爲めに役せらるゝものなり、故に彼れ等の眼には常に相對的のものを認めらべしと雖も、カントの所謂現象裡の眞實体の概念を得る事能はざるべきなり、彼れ等は能く世の爲めに働くを得べきも、而かも觀念を目的として進む能はず、夫れ此の如し、されば世俗的人事と精神的事業とは到底相伴ふべきものに非ずと斷言するも敢て不可なきなり。

精神的事業は常に觀念を目的とす、此觀念によりて物及び世界の本躰を闡明せんとす、而して其の此れをなすに二個の方法あり、即はち一は之を直覺すべく一は之を思惟すべし、前者は即ち美術家の行ふべき所のものにして、後者は即ち哲學者のなさんと企つる所なり。

思惟によりて其本躰を認識せんとせば勢ひ明徹なる純智の機能を要す、然れども此の如きは此れを得るに難く、又假令もし明徹の純智を有するものあるも意思の邪雲によりて此れを攪亂せらるゝ事多し、此れ史を溯れば人類生存し始めてより以來茫々五千歲、尙は哲學の眞諦を捕捉せし者非ざる所以なり、於是乎唯、物其物を實利より分離し、直覺的に其本躰を捕へんと欲するもの、即ち美術なるもの起る、美術には推理の煩なく、唯に直覺して其間意志を交へざれば即ち足る、換言すれば美術は物の寫象にして、純客觀的に世界の本躰の直覺を表示するも

のなり。

要するに精神的事業の成功は實際世界に臨むと異にして其意思を交へざるにあり、故に此れに從ふものにして既に名利的の思想中に燃へ、世間的觀念其胸に蟠る者ならしめば、到底其極所に達するを得べきに非ず、宜なり古來哲學者美術家として稱せらるゝ輩の多くは、其終生を不遇の間に終りし事や。

餘裕

自然神秘の芳醇に醉ふの時、人は一種の感興を起す、宗教家は此によりて徹底光明の安心を得、詩人は此に動かされて觸線純美の珠玉を吐く。

醉ふて佳人の細腰を枕とし、常に戀の淵瀨にのみ漂へる彼れ、一度秋風の檐の小窓に呟くに遇ひ、酒力漸く醒むるに及んで起つて後庭に出づるの時、宛かも夕陽西山に落ち、素月淋しく中天に懸るの景に接せば、身は恍惚として人我の界を忘れ、世を淡き一場の夢と感ずべし、此時彼れが胸裡一種の詩歌なきを得んや。

天朗らかに氣清み、惠風和暢し、杖に櫻の爛々たる時、乘りたる駒の足もゆたかに、胡蝶と散る落花を鎧の袖に拂ひて、勿來關頭和歌を詠せし彼れ源將軍の聲や如何なりし。

堀は深く巌は高く、劒戟は利鎌の如き月光に映じて、夜は將に三更、霜は滿天を罩め、風は淅瀝として死したる如き天地に異鳥の聲かすかなる時、陣頭戟を横たへ吟聲朗らかに、賦したる漢詩の調や如何なり

し。

人生血あり、涙あり、感あり、又情あり、時に神來の感興に襲はるゝなしとせむや、彼れ歴山大王は常に軍營干戈の間に猶ほホーマーの詩集を繙き、普王が食堂は佛文學者の清話雅談に歡聲湧くが如かりき、夫れ餘裕なきの人は例へば花なき樹の如く、到底大人物の器に非ざるを想はしむ。

今や一二詩人ならざる人の詩を拾ひて、此れが趣味を掬せんか。

白河樂翁が俳句に、

牛の脊を動かす蠅の力かな

といふがあり、其俳としての價値如何は少時らく此れを論せざるも、此一句能く翁の性格を髣髴せしむるに非ずや。

其他木戸孝允のものしたりと傳へらるゝ、

昨日二上り今日三下り、調子そろはぬ糸筋の、ほそい世わたり日わたりも、其所ぢやなぶられ彼所ぢやせかれ、主のこゝろに誠があらば、つらいつとめも厭やせぬ。

の如き、又頼三樹三郎の

雨はしきりにふりしきる、通りかゝりし小梅道、粹な住居の柴折り戸を、呼べと叩けど音もせず、まだお目が覺めぬじやないかいな。

を始めとして、我國義士の模型と稱せらるゝ大石良雄の如き、歌俳俗曲の作爲又少なしとせず、今一例を次に示す

里げしき

更けてくるわのようはひ見れば、宵の燈火うむき寐の、夢の花
さへ散らす嵐のさろひきて、閨房を呼びだすつれ人男、餘所の
さらばもなはわはれにて、埒もなかどの明くる東雲、送る姿の
一重帶、解けてはどけて寐亂れ髪に、つげの〳〵おぐしも、さ
すが涙もばら〳〵袖に、こぼれて袖に露のよすがのうきつとめ、
こはれて袖に、露のよすがのうきつとめ。

此外一、二和歌の例を示せば、

ものゝふの思ひこめにし一すぢは　平野國臣
なゝよかゆともよしたゆむまじ。

思ひきや春ならぬ世に生れきて　林子平
花も實もなく朽ち果てんとは。

大嫌ひ佛坊主にさつま芋　藤田東湖
のらくらものに利口ぶる人。

咲く梅の風に空しく散るとても　武田耕雲齋
かはりは君が袖にうつらん。

もやに居て雨のはら〳〵落くるは　高山彦九郎
哀れぞまさる涙なりける。

韻詩殊に我國の如き多種の短詩形を有する國に有りては、詩人ならざるものも時に此をものして其感興をやる、蓋し其思想を高むる上に於て益する所少なしとせず。夫れ人心最奥の琴線が、一たび天地の美に觸れて激動するや、感情切迫し辭句急迫す、此間豈に綴々乎たるものを容れむや、短詩は詩の精粹なり且つ至醇なるものなり、從つて其

收むる所感情の切なるもの、辞句の急なるものならざるべからず、既に切なる感情を要す、勢ひ超越したるものならざるべからず、既に辞句の急を要す、從つて短少と的確とを兼ねたるものならざるべからず、而して此の如きに適するは、寧ろ詩想と感情に乏しき詩人よりも、多感多情の常人の間に求めざるべからず、余輩は此意味に於て、詩人ならざる人の短詩を歓迎すると共に、其人其れ自身に對して、一種の崇高を感せずんばあらざるなり。

一茶の俳句

宇宙の美、人生の美、悉く皆此れ詩境に入るべきものなれども、如何なるものが果して美なるやの問題に至りては、亦當さに審美學に待たざるべからざる所なり、然れども詩人は直覺に敏なるものなり、哲學者科學者に聽かずして、尚能く宇宙人生の美を解するものなり、彼れが手には哲學者科學家が未だ知らざる所の秘鑰あり、彼れは此秘鑰を以て其美を闡き、其美をうたふものなり、されば詩人が其材を求むるに當りてや常人の見て凡となす所のものも一度彼れが感情に觸ふるゝや、忽ち玲瓏たる珠玉と化す、此の如くにして街頭に連彈する新内語り、寒空に冴ゆる駒下駄の音は本より、枯木に憩ふ寒鴉も、野に捨てられたる案山子も、渚に繋がれたる舟も、茅屋を照らす月影も、其他萬般の人事的及び自然的現象は、皆彼等に好個の詩材を與ふるものなり、然れども我國の短詩中殊に詩材を最も廣く且つ手近に求め得らるゝ者は俳句に如くものなし。此点に於て俳句は遙かに和歌漢詩の上に

居るものと曰はざるべからず。

俳は此の如く詩材を廣く求め得らるゝ点に於て獨特の長を有す。而かも古來數百千の俳人中、此點に於て成功したるは甚だ少なきを見る。強て此れを求むれば余は指を蕪村及一茶の輩に屈せざるを得ず。

蟬をかくして母の夜伽かな

虫の屍を指して笑ひ佛かな

猶彼れに此類の句多けれど畧しつ、其蟬と曰ひ、或は虫の屍と曰ふ、我俳壇中此の如き材を取つて、巧みに此れを詩化し得るの手腕あるもの果して幾何かある、されど忌憚なく評せしめば、此点に於ては彼れは一歩を蕪村に讓るものと曰はざるべからず、蕪村が思ひ出しては忘れ兼ぬる後朝、鰯焼る宿、突當りし盲人、枕頭の秋水、咽びし小狐、

追剝、强盜、借錢取りの類を悉く自已の藥籠中に收めて、此れを詩化するの技倆に至りては遙かに一茶に勝るを見る、今此種の句に付き相類似せる両者のものを比較せんに、

今朝秋や瘧の落たるやうな空　一茶

秋來ぬと合點させたる嘘かな　蕪村

一方に於て彼れは其材を廣く取ると共に、他方に於ては平常の俗語法を其の儘俳句に用ゆるの奇才を有せり、此点に於ては蕪村の遙かに及ばざる所にして、彼れが友なる大江丸と共に、我が俳壇の二異才と稱すべきなり。

柳からもんくあゝあと出る子哉

欠けるなら斯かけろとやけふの月

向たい方へつんむいて菊の花
吼る鹿なれをうさんと思ふかよ
草くれてさらば〳〵や駒の主

彼れが一代の句集を繙けば其大半は此種の俗語調なるを見るべく、從つて彼れが此種の句に於て其特色と其長所とを見出し得べし、此点に付ても余は再び彼れと蕪村とを比較せんとす。

親といふ字をしりてから夜寒かな　一茶
起て居てもう寐たと云ふ夜寒哉　蕪村

彼れが初めて俳句の趣を受けしは葛飾派の其日庵素丸よりなりき、然れども彼れが天賦の詩想と、飄逸なる奇才は、幾何もなくして其等輩を壓し點者の列に進ましめたりき、されど彼れは長く古格の嚴正なる、

點取の隆盛なる蕉風門下に其膝を屈し、其想を曲ぐる能はず、去つて自己が獨創の一派を起しぬ、是に於てか彼れは自己の欲する所に動き思ひの儘に其吟懷をやりぬ、時には一蹴一笠飄然家居を見捨て、自然を友とし山水を踏破し、專ら其詩想を練るに務めたり、後年の圓熟蓋し此間の修養に負ふ所少なからざるべし、彼れが文政の日記に、『ふと諧々たる素振の俳諧を囀り覺ゆ、折柄敷島の道の盛なる時に、大木の蔭賴母敷立寄て十日二十日の勞を休むるに至れり』といへるは、此間の消息の一部を吾人に語るものなり。

彼れは蕉風を捨つるに及んで、猶は當時餘燼を殘せる談林派の滑稽を眺め、蕪村大江丸等が洒落を見て、俳句に『れかしみ』の必要なるを感じ、其句姿を俗語調に取ると共に、强て天然と人生とを樂しき方面よ

り觀察せんと務めたり。然れども彼れが幼時よりの悲しき境遇と、其固執する信仰とが、既に彼れの思想を導きて厭世の渦中に投じたり。彼れは幾度か此の境域を脱せんと務めしも。終に全く免かるゝ能はざりき、是に於てか彼れは蕪村の洒落を得ず、芭蕉の幽玄に達せず、其思想の厭世は常に其句裝の滑稽と矛盾し、爲めに其吟ずる所の俳句多くは中心に泣きて外苦笑するが如く、例へば時雨沛然たる間に日光を臨むが如きの奇觀を呈す、而かも此の矛盾此の衝突こそ一茶の一茶たる所以にして、彼れの短所の此所に存すると共に、彼れの長所も亦明かに此所に存せり。

痩たりな門の螢に至る迄
かな釘のやうな手足を秋の風

息才で御目にかゝるぞ草の露
露ちるや地獄の種を今日もまく
膝抱て羅漢顔して秋の暮

自から笑ふて演ずる落語家の滑稽談は、反つて聽者をして抱腹せしむるに足らざるが如く、悲哀の調を以て言ひ表はされたる厭世的詩歌は此れを誦する者をして悲感を起さしむる事比較的少なきを常とす。彼れが句姿に於て滑稽洒落を裝ひつゝ、想に於て悲哀の響を有するは、誦者を厭世に導く點に於て一種の魔力を有するものと曰はざるべからず。今彼れが異色なるを慨めんが爲めに、次に他俳人の吟にかゝる句姿の滑稽なるもの四五を示し、以て彼れが如何なる点に於て其の技能を有するやを示さんとす。

初紅葉お染と云はゞ龍田山　蕪村
姓名は何子か號は案山子哉　仝
松に藤蛸木にのぼるけしきあり　宗因
聽て見よ梓くらはせん蕎麥の花　仝
長持に春隱れ行く衣更へ　西鶴
雲の峰山見ぬ國のひろいもの　仝
笹ぶきの亭主ぞさわぐ小夜嵐　正友
堀れば地の底から月も出水かな　仝
尾も見せず山は化けたり雪坊主　松意
花に幾重三ッ瓶子は上戸の紋　仝

彼れが思想や既に厭世に傾く、故に其句集を取りて主觀的のものを拾

はゞ、其句の外形は兎に角、其奥妙の極点を叩かば一として厭世のきならざるはなし。然れども十百の句中遇まゝ見出され得る、客觀的の句を摘み取りて仔細に此れを驗せば、其厭世の臭味を止めざると共に、又彼れが特長を尋ぬる事能はざるべきを發見せん。

土藏から筋違にさす初日哉
犬の子のふまへて眠る柳かな
畑打や子が這ゐるくつくし原
大盤ゆらり〳〵と通りけり
初瓜を引とらまいて寢た子哉

元と俳句は理に陷るを忌む、而かも此れを避けんとせば勢ひ客觀的の句を求めざるべからず、夫れ僅々十七文字に限られたる短詩中に自個

の思想を寓せんと欲す、理に陷るの弊ある又止むを得ざるに非ずや。故に余輩は此点に於て寧ろ常に客觀的の句を取らんと欲するものなり、されど此は俳諧上の談理にして此所に論議すべきに非ず。今や去つて古來俳人のものしたる句集に付て、客觀的のものを選び取らんとするに其數實に尠少なるを覺ゆ、蕉翁以前の古俳諧に於ては殆んど此類の句を見出すに苦しまざるを得ず、蕉翁が正風の一派を唱導せし以來、漸く此種の句を見るに至りしと雖も、猶ほ其數主觀的のものに比して十の一にも當らざるべく、殊に此種の句に吟者の特長を見出す能はざると共に、併せて又上乘なるもの求むる能はざるは如何なる理由の存して然るや、余は這般の理を次に俳人一茶に付て說明せんとす。

或一個の詩人の思想の如何を考察せんとせば、先づ四季に於ける彼れ

が詩を眺めざるべからず。

滿天の秋色白露冷かに、木枯風空に寂寥の聲を放ち、落葉地に蕭殺の響をなし、荒涼たる孤林葉漸く疎にして、野塘水涸れ水車聲なく、乾坤唯だ寒闌を極むる秋日の暮景。若くは寒鴉枯木に啼き、饑猿雪山に吼へ、草花已に化して土となり、籬菊霜に苦んで將に節を屈せんとする冬日の觀に對しては、心なき身にも物の哀れを感じ、世の無常を悟るなるべし。此れ眞に厭世詩人が其手腕を示し、其詩想を見はすの好季節なり、古來より厭世詩人に富める我が詩壇の、比較的秋冬二期に於て其成功せるを見る決して遇然に非ざるなり。然れども坤輿一轉曆日改まり、黃鳥幽谷を出でゝ彩霞溪間を置め、春水溪く芳草の間を流るゝの時、若くは柳暗花明の艶ひつしか逝水に送られ、血を吐く杜鵑

月に鳴いて、蒼翠滴らんとするの時は、此れ樂天詩人が其懷を自然に托して樂しき彼れの歌をうたふに適せるに非ずや。而かも此樂しげなる自然に對して、厭世詩人は如何なる詩材を拾ふべきや、求めて此れを得んとすれば、咲き匂ふ花の下に立ちて夜半の嵐を想ひ、生ひ茂れる樹陰に憩ひては明日の木枯風を憂ゆる等、凡て裡面の觀察をなさゞるべからず、裡面の觀察よりなる詩は主觀詩中に於ても殊に理に陷り易きものなり。和歌は兎に角、俳句に於ては此れを避けざるかべらず、況んや一茶の如き自ら句に『おかしみ』を交へんと欲し自然を面白く樂しき側より眺めんと欲する者、如何んぞ喜んで此の如き裡面の觀察をなさんや、然れども彼れの思想やもと厭世の境に陷れるもの、此の景に對して其主觀を交へなば成る所の句悉く厭世の臭味を脱するを得ざ

らん、此に於てか彼れは止むなく客觀の句を作りて以て其自然に伴はしめたり、然れども秋冬の哀れ氣なる自然に對しては其自然と自己の思想と符合するに至り、遂には不知不識の間に其主觀を交ゆるに至れるなり、此れ彼れが句集を繙くに當り、唯だ春夏の句に於て多少客觀的のものを見出すを得べきも、秋冬二期に於ては全然之を見出す能はざる所以なり。此の如くにして客觀的の句には自己を交へざるが故に、從つて其特長を見出されざると共に、多くは自己の思想に適合せざる自然の景に對して吟せしものなれば、比較的成功せるもの少なきは又理の然らしむる所なり、此は單に一茶に付てのみ曰ふべきに非ず、一般詩人の作品に付ても多くは皆此傾向を有す、是に於てか理としては短詩は客觀的なるもの比較的成功すべき性質のものなるに、事實に於

ては實に之れに反するが如き觀あるは、一に這般の源由に基くものと曰はざるべからず。

一茶の厭世詩人なる事は前述の如し、而して彼れは一面に於て厭世詩人なると共に、一面に於ては天然詩人なりき。彼れは常に自己の思想なる厭世を訴ふるに自然をかりて人をからず、千百の彼が句は實に自然の美に感應して迸出せしものと云ふも敢て不可なきなり。此點に關しては世人も亦一般に認むる所にして敢て余輩の説明を要せず、然れど爰に一の例外あり、彼れは一般に曰へば天然詩人なる事疑なしと雖も、或一定の範圍に於ては、人事の間に尙彼れが詩境を見出せり、而して所謂人事に於ける或る一定の範圍とは何ぞや、親子に關する事即ち此れなり。

彼れが人事に付て其詩材を求めしは唯だ親子の關係を主とせりと雖も、而も此れに關する句は實に多からざる彼れが一代の句中求めんと欲すれば、數十を得る事難からざるべし。今其中の四五を左に示さん、

名月をとつてくれろと泣く子哉
わんぱくや傳られ乍らよぶ螢
母親にさしかけさせし日傘かな
をさな子や笑ふにつけて秋のくれ
義理のある親子むつまじ夕涼
小夜しぐれなくは子のない鹿にかな
子をかくす藪の通りや鳴雲雀
鹿の親笹吹く風にもどりけり

水いらぬ親子ぐらしや山の鹿
盆の灰いろはかく子の夜寒哉

彼れが此の如く親子の關係に付て其詩材を求めしは、彼れが幼時苛酷なる繼母の手に育てられしと、少時父母に疎んぜられて其家を追はれしとが、後年に至るまで深く彼れの中心に彫まれしによれるならんか。

彼れは佛敎に對する熱心なる歸依者なりき、從つて同情の涙にわつく、其憐憫の情は廣く草木禽獸の屬に及べり、其情の厚きに過ぐるや、遂には蚤虱の類に至る迄此れを殺すに忍びざるに至る、此情は獨り其行爲の上に見はれしのみならず、其句の上に付ても明かに此れを尋ねうべし、

まゝつ子や涼み仕事に藁たゝく
我と來て遊べや親のない雀
我袖を親とたのむか逃はたる
彼岸とて袖に這する虱かな
彌陀堂の土になる氣かさり〳〵す
手足まで寒晒なり下部哉
洒落ならんと欲して常に悲哀に沈淪し、滑稽ならんと欲して其局終に無常に陷り、空しく樂天洒落の外觀を裝ひ乍ら、中厭世の臭味を脱し得ざりし所は即ち彼れが面目の存する點なるべきも、聽て此れ彼れが第一流の俳人たるを得ざりし理由たらずんばあらず。然れども前にも既に述べたりし如く、厭世一度び其極所に達し、一大光明其頭上に輝

かたるに及びては、彼れは遂に洒脫の妙境に達し得べきものなり。一茶の如き本より此境に達し得たりと曰ふべきに非れども、時として一種の感興據然として其詩想を突くや、彼れは一時渾然として白雲界裡の洒脫詩人となりぬ、

ともかくもあなた任せや年の暮

雪なれや貧乏徳利こけぬうち

燒米を粉にしてすゝる果報かな

柿の實や何日ころけて麓まで

無意にして此等の句を眺むれば、恐らくは厭世詩人なる彼が作品たりとは思ひ及ばざるべし、蓋し此の如きは常時の彼れが句にあらず、一時の感興は彼れを導きて此圓熟の境に運びしものならむ。余は彼れが

句集中此等の句を求め得らるゝを見て、彼れは尙思想に於て一歩を高むべき資格を有せしものなる事を信ずると共に、天が彼れに老後尙十年の齡を貸さゞりし事を惜まざるを得ざるなり。

宗教と哲學

宗教は愚人の哲學にして哲學は賢者の宗教なりとはショッペンハウエルの曰ひし所なり、二者共に宇宙の奇に打たれ現象の怪に遭ふに及びて其の端緒を開きしは一なりと雖も、一は其奇怪と其偉觀とを根本的に研究せんとし、一は唯だ此れに服從し此れを崇拜するに至りしなり。

我幼時屢々輕業なる興行物を見て、其綱渡りの術の巧妙なるに驚きた

りき、後家に歸りて此れを爲さん事を試みたりしが、遂に果さゞりき。此技に於て唯だ熟練と經驗とによりて其成功を期せんとするは、恰かも宗教の方便によりて大悟せんと欲するが如く、其重心を計り綱の動搖を極め物理的の結果に基きて此技を爲さんと試むるは、哲學により て宇宙の眞理を研めんと欲するが如きなり。

哲學は唯智によりて宇宙を研めんとし、宗教は情に訴へて唯だ此れに從はんとす、而かも宗教の信仰は動もすれば人心を、一方面に固執せしめ、爲めに哲學的研究を妨ぐるに至る事あるは免かれ難きの事なり、余は此所に兩者の是非得失を辨せんとするに非ざれども、明哲なる純智を有する者は徒らに其理由を研めずして服從をなすの愚を斥け、進んで之を研究すべき哲學の門に遊ばんを勸むるものなり、況んや小乘

の安心に隨喜の涙を流す愚夫愚婦の多きを見ては、余輩は此れを憫れまずんば非ざるなり。

余輩は最後にショッペンハウエルが哲學を研究するの愉快に付て述べたる語を引かんとす。

學を研鑽するは恰かも高山難岳を攀づるが如し、荊棘を排し蒙茸を披き、幾度か躓き且つ幾度か轉ぶ。然れども歩一歩、里一里、登るに從つて愈々廣く下界に瞰臨し、俗世の喧囂を離る、其絶頂に踞して傲嘯し、遠く雲物を見て超然たるの愉快は、此れを他に求め得べきに非ずと。

我國神代の歌舞

古史の傳ふる所により我國最古の歌を求むれば、先づ伊邪那岐伊邪那美両尊の阿那邇夜志云々を以て濫觴とすべきなれど、彼れを以て直ちに和歌なりと斷言するは如何はしく、殊に一歩を讓り單に歌は感情を表白するものなり(此の如きは到底曰ひ難きなれども)てふ不完全なる定義の下に、彼れを以て和歌なりと曰ふを得べしとするも、此の如きは余が爰に記すべきの限りにあらず、唯に唄ひしのみにては或は文學史上より又は謠ひ物等の事を記さんとする上よりはもとより究むべき事なるべきも、今はかゝる範圍迄も侵して進まんとには非ず、されば彼の八雲立つ云々の歌を始め萬葉にのせある和歌等凡て聲に出し曲節を付し、或は假令樂器に上せたるものにもせよ苟くも歌舞に關係なき限りは全く此を省略する事となしぬ。

何れの國に於ても歌舞の起原を明かに知るは到底なし難きの事なるべし、其起原として後世より認めらるゝは或事情の下に殊に時人の注意をひきし物の古記又は口碑に傳はりしに過ぎずして、既に其以前に於て歌舞の存在せしは明かなる事實なり、平田篤胤氏も『舞を舞ふ本の意は謠へどもなほ心歡ばしきに得堪へざるまゝに、手を伸し膝をうちてその謠ふまに〳〵拍子を合せつゝも猶足づまに立ち舞て其歡ばしき情を述る態なれば』と曰ひし如く如何なる未開の狀態に有りても苟くも人に感情の存する限りは、必ずや折にふれ時に付け其情の發して終には單純無味乍らも一種の歌舞をなせしや疑ふべきに非ず、されば我國歌舞の起原として古記に見えたるは石窟開きの時にあり、即ち天照太神の事により天石窟に隱れ給ひし時世の常闇となりしを群臣愁ひて、

石窟の前に種々の物を供へ飾り給ひて、禱奉りし時天細女命

手次繫天香山之天日影而爲鬘天之眞拆而手草結天香山之小竹葉而於天岩屋戸伏汗氣而蹈登杼呂許志爲神懸而掛出胸乳裳緒忍垂於番登爾高天原動而八百萬神共咲

其の滑稽にして單純なる歌舞の樣と、簡單なる粧飾とを推知するに足る、此時謠ひしとて傳はれるものは、

比登布多美用伊都牟田那那夜許許能多理毛毛智用呂都

此は歌と曰はんよりは詞と曰はん方穩當なるべきが如しと雖も、此を謠ひて舞をなせしと曰へば、此れを以て我國歌舞に用ひし歌の最古なるものと曰ふも誤には非るべし。

即ち此れ史に乘する我國歌舞の起原にして、又神遊びの始めなり、神

遊びは後神樂と稱し今も猶宮中の內侍所及び神社に其名殘を止めぬ、當時の樣を今より想へば勿論無味單純なるものにして舞ひ唄ふに一定の方式の存ずるなく、所を定めず時を限らず隨時隨所に行はれしは明かなるも、殊に石窟開き以來時人の注意を惹く程の事實存せざりし故正史に記さゞりしならむ、後外樂の輸入と共に神樂も非常の變更を來し、遂には其昔の面影を失なひ嚴乎たる規律の下に漢風の調子を用ゆるに至れり。

此れに次ぎて天照太神の天石窟を出で座し、時、天原及び天下自から照り渡りて八百萬神等皆相共に見て其面の明かなるより、愛に欣喜の情禁ずる能はず、

伸手而歌舞相與稱曰河波禮阿那於茂志呂阿那多能志阿那佐夜憩伜

慰矣

此れを以て大直會の起原となす。

當時は前に述べしが如く歌舞に一定の系統有るなく、秩序の存するなく、唯だ感情の發する所歌となり舞となりしものなれば、今より推して此れが沿革を記し發達の樣を述ぶるに由なし、然れど此頃に於ても折につけて歌舞せし事は少なからざりしならむ、一例を示せば健速須佐之男之男太神以佐世木葉爲頭刺而踊躍せられし事など見えたり。

尙當時の風俗として殯時にも歌舞せし事あり、即ち天稚彥が死せし時其婦下照姫夫の死を悲しみ慟哭する聲天の原に達せし故、天の群臣天降りまして八日八夜歌舞せし事見ゆ、此れを始めとして此俗習は人皇の世迄長らく傳へられたり、此の殯時に於ける歌舞の大体の沿革を知

るには本居翁が古事記傳の一節を見るを便とす、即ち『天皇(允恭)崩坐し處に新羅王聞天皇既崩驚愁之貢之調船八十艘及種々樂人八十云云泊于難波津則皆素服之云云 張種々樂器自難波至于京或哭或歌舞遂參會於殯宮也、天武卷(喪紀)天皇崩座し處に云云 次國國造等隨參、赴各誄之仍奏種々歌舞、持統卷に元年春正月丙寅朔皇太子率公卿百寮人等適殯宮而慟哭云云 奠畢膳部采女等發哀樂宮奏樂二年冬十一月乙卯朔戊午皇太子率公卿百寮人等與諸蕃客客適殯宮而慟哭焉於是奉奠櫬節儛云云』これも同天皇の大御殯の時なり、又繼體卷に近江の毛野臣が新羅より還さまに津島にて死たりしを本鄕に歸し葬るとて淀川を船より上る時に妻の歌に比擺嚬耿喩輔釋能明樓云云 などあり』此遺風として今も見るべきは、神道に於て葬送の節に樂を用ゆる、猶は殆んど祭典に於ける

が如き少しく其名殘を止めたりと雖も、有道に歌舞する時は何時より止みけん、今より推知すべからず。

其時下照姫の唄ひし歌は、所謂夷曲として今も尙傳はれり、即はち

阿米那流夜淤登多那婆多能宇那賀世流阿那陀麻波夜美多邇布多和

多良須阿治志貴多迦比古泥能迦微曾也

此を夷曲と曰ふは後世朝廷の樂府にて呼びし名なり、即はち古へより傳はれる歌の中にて、殊に優れて美はしきものは此れを樂府に採用し、管弦にかけ舞にも合せて奏せしを後より呼びて何曲何振等と稱へしにて此曲の外古今集大歌所の歌に近江ぶり水莖ぶり四極山ぶり等あり、又今は傳はらざるも續日本紀に難波曲倭部曲淺茅曲廣瀨曲八裳刺曲等の名稱見へたり、而して右に揭ぐる歌を殊に夷曲と名けたる所以は、

書紀に此歌と共に幷べ記せし歌に『あまざかる鄙の女のい渡らす瀨と石川片淵かたぶちに綱張わたし女ろ寄に寄し依り來ねしかはかたぶち』とある歌の首の鄙と曰ふ語をとりて名けしなるべし。

又彥火々出見尊兄火闌降尊に苦められ遂に海宮に趣きしも、後潮滿瓊を得て歸り此瓊を以て兄の惡業に報ひ給ひし時、兄尊此れを畏れて罪に伏し永く弟尊が俳優の民たらん事を誓ひしも、猶は弟尊の慍解けず、相共に語り給はずよりて兄自ら

著特鼻以赭塗掌塗面告其弟曰吾汚身如此永爲汝俳優者乃擧足蹈行學其溺苦之狀初潮漬足時則爲足占至膝時則擧足至股則走廻至腰時則捫腰至腋時則置手於胸至頸時則擧手飄掌自今及今曾無廢絕

此の如くにして起り、而して此れの後世迄も隼人の舞として其名殘を

止めたるは職員令、國史令式等の書に見へたれど、後世に傳はりし集人の舞は風俗歌舞にして名は此れの後を襲ふと雖も、歌舞の實は全く異なれる者なる事を記憶せざるべからず。

以上述ぶる所により神代に於ける歌舞の大体に付ては之を窺ふを得べし、今は終りに臨みて少しく神代時の樂器に付て記さんとす。

天沼琴、此は大和琴と稱する物の始源なるべく、此名の史に見へ初めしは大國主尊其妻須世理姫と共に、須佐之男之尊の髮を其室毎の椽に結び付けて、

取持其太神之生大刀與生弓矢及其天沼琴而逃出

と云ふを以て最初のものとなす、而て天沼(音瓊に通ふ)琴は其名の示す如く赤き玉にて飾れる琴にして、而も其絲筋は大和琴の如く六弦なりし事は彼の石窟開の條に『加奈止美命與並天香弓六張而爲緒』とあるを以て知るべし、(古事記傳には天詔琴なりとし、其は神の來て詔言し給ふ意より出でたりと云へど、余は古本の古事記により沼琴の當れるを信ずる故此所には沼琴としたり。)猶古事記傳には此條の解に『つら〳〵思ふに上代には夫婦の結びをなすに、必らず女の親の方より聟に琴を與へて其を長く夫婦の中の契とせし事にぞありけむ』と云へり、疑はしけれど序なれば書き加へつ。

右の琴の外鼓、笛、及木を合せて拍子をとる即ち今の拍手木樣の樂器存せしが如し、即ち神代卷伊奘冊神退ませる時の事を『土俗祭此神之魂者花時亦以花祭又用鼓吹幡旗歌舞』と有れば其頃既に鼓の存せし事を知るべく、又笛は所謂天鳥笛の名稱あるものにして石窟開の時に既

に此器を用ひ木と木を合せて拍子をとりたるが如し、即ち『採天香山之竹於其節間彫孔而吹鳴木木合合而備安樂之聲』等とあり、然れども此事を記せるは元々集、本朝事始、御鎭坐本記等皆中古に撰ばれたる書のみなれば、此れを確證するは難し、されど神代に琴の存せし事は記紀共に記して確然たりとせば、既に琴の存せし時代に笛、拍子木類の存せし事は假令此等の書に記さゞるにせよ、其存在を推定する蓋し失眞の臆說に非ざるべし、誰れか疑はん秋は高く霜は坤輿をこめて虫聲の唧々たるを耳にし、吹く木枯風の松の梢に自然の音樂を奏するを聞きては、必らずや清音嘹々たる篠笛の製作を試みしや自然の然らしむべき所、況んや笛は音律を正すに尤も適當なる樂器たるに於てをや、又拍子木の類は完全なる樂器として形ち造られざりしにもせよ、既に

歌舞すると曰へば此れが音調曲節を整へんがため、或は手を拍ち石を打ち木と木と相擊つが如き事は人情の常必ず此をなせしや疑なし、此れ余が此等の樂器をも神代に存せしものなる事を說きし所以なり。

星光の美

上弦の月既に夢の如き西山の頂に落ちて、袖は微風に順ひて靡けど、今は肌寒からぬ春の一夜を美はしき自然と共に樂まんと、獨り鴨の清流に沿ふて步を移せば、夜は次第に深く、紅塵自から靜まり、岸に咽ぶ水の聲のみ耳に落ち來りて、我れの俗慮は何時しか洗ひ淸められぬ。即ち杖を堤上に立てゝ長嘯一番、仰いで中空を見渡せば蒼穹萬里、中に一點の曇りを止めず、滿天の星斗は靡く楊柳にこぼれて、淸く且つ

美はしき光を下界に放つ事は何時に變らねど、殊に今宵は何となく心に一種の神々しさを覺えて、思はず見入る方に、はしなく流星北より南に落ちて、跡にひかれたる金線の消ゆる行く樣、實に耳に聞くべき詩歌を目に見たる心知して、少時は唯感に打たれて我れ我れを忘るゝの境に陷りぬ。

人の實際社會に交はるや或は功名と云ひ或は利慾と云ひ、浮雲の其れに似たる水泡の其れに通へる、富貴榮華の夢を辿らんとし、其局終には自已なる者の爲めに使役せらるゝに至り、耳目に觸れ口鼻に落ち來る天下の諸物を取つて、直ちに此れを利用し以て自己の慾心に充てんとするを計る。故に意思は常に其胸中を支配し、智は此れが爲めに役せらるゝ所となりて、其至純を保つを得ず。夫れ智の意志の緣に繫がれて生存の用をなし、其自由を得る能はざるの干係は、人畜共に相異るなし、然れども人の獸畜に勝る、時あつてか其智能く其意思と離るゝ事を得べし、此時に於て初めて人は哲學の奥を極むるを得べく美術の眞に達するを得べし、而も現時所謂詩人なる者果して此の眞諦に達し得たる者ありとするや。彼等詩人の天職とする所は、世界の本躰を實利より分離し此れを直覺して示現せしむるにあり、此の如くにして後初めて宇宙の機微を闡き、美の琴線に觸るゝの作品を世に示すを得べきなり。夫れ詩の根底とする所はショッペンハウエルの所謂、充足理法の外に立てる觀念の認識にありとす、而も此境に達せんには前に述ぶるが如く其間意思の跳梁を許すべきに非ず、實利の觀念を挿入すべきに非ず、若し其れ此の如くなるを得ざれば詩の目的たる認識の示

現を遂ぐる所能はざるべし。要するに名を得んが爲めパンを得んが爲めに詩を作る間は、到底詩の純に到達する能はざるべきなり。余の一度足を關西の地にみ踏入るゝや、所謂關西文學者なる者の或る部分を見き彼等は世辞に工みなり、世才に長けたり、甚だしきは幇間の職をも取り得べき適格をさへ備へたる者有るを見て、私かに驚嘆の聲を發しき。夫れ世才と言ひ世辞と言ひ、凡て處世の術に工みなる者は自已を忘れ自已を失ひたる沒我的主躰を見出し、以て純客觀的に世界の本体に直覺を與ふる能はざるは、既に前に述べたるか如し、畢竟するに所謂處世の術と美術(廣義の)とは両者全く相矛盾し、互に相容るべき者に非ざるなり、關西文壇上(一二文士を除きて)善く世才に長ずるの士を見るも、其多く非凡の作品に接する事能はざる又故なしとせず。

夫れ世界の實体は元と其觀念を認識せらるゝを犯むものに非ざれども、此れに實利の概念を結合するによりて遂に智は其自由を失ひて此れを爲すを得ざるに至るべきなり、彼の實際世界も之れに對する事詩に於けるが如く、無意無慾にして觀する時は能く其美を發輝す、吾人が生存目的に利用するの意思を挿むを得ざる列星を望んで、特に其美に打たるゝ者又此の理に外ならざるを信ず。

余は星光の美に打たるゝと共に、關西文士の餘りに世智世才に長せらるゝを想ひ、敢て此文を草す

冥途の飛脚

誰も知りたらむ如く詩に三種あり、叙事詩抒情詩及び戯曲是なり、叙

事詩とは人物の活動と事件の經過とを、單に歴史的に叙述する者にして、深く人の内面に立ち入らず、其個人的性格が歴史上的事件となる迄に如何なる發展變形をなせしやを説かず、只事件を事件とし人物を人物とし客觀的觀察をなすのみ、抒情詩は之と異なりて其内部の原因即ち事件活動の中心なる人物の心性を活勢的に叙述せん事を務む、されば人物の心的動作は抒情詩にとりて唯一の對象なり、然りと雖抒情詩は其個人的特質が、外界の刺激に遇ひて起る内面的活動の樊理に止まり、未だ此活動發展の極、遂に一個の出來事として外部に現はるゝ所以又既に見はれたる出來事が更に他の種々の出來事と關繫して遂に一の戯曲的動作を構成する所以を言はず、是に於てか戯曲あり、曲は外部を寫して内部に及ばざる叙事詩と、只管内部に依傍し百千の情

緒胸中に出入去來する委曲を盡さんとする抒情詩との二者を、結合調和せるものにして人を主とし事を客とし事件の外部的形跡と共に、其源因とせる内部的活動をも知らしめざるべからず、之れ蓋し戯曲が最進歩したる詩なる所以にして、秀拔なる戯曲家が他の詩人に比して、極めて寥々たる所以なり

英にセークスピアあり獨にゲーテあり佛にコルネーユ、モリエールあり以て世界文學の寶庫に幾許かの光輝を添へぬ、あはれ我國一の『ドラマチスト』なきか膨脹的國民と稱し、世界の日本と誇る國に、世界に向つて推薦すべき一の『ドラマチスト』なきか

過去三百年、脚本壇の堀越榮陽、並木正三、櫻田治助、並木五瓶、鶴屋南北、古河默阿彌、院本壇の紀海音、竹田出雲、近松半二、福内鬼

外等其中の優なる者なりと雖も、未だ以て戲曲家として稱するに足らず、默阿彌の作稍見るに足るのみ。

余輩は茲に於てか、元祿の大詩人近松門左衛門を思はずんばあらず、彼の歷史は暗澹にして知られずと雖、彼の殘せし數十の院本は、吾人をして彼を思ふて止まざらしむるものなり、其時代ものに至りては既に世評の存するが如く、或一面に於ては成功したりと雖一般に曰ふ時は其極致に達せざりしもの、如し、然れども其世話物に至りては、古往今來未だ能く彼れに及ぶものあるを見ず、彼れや實に我國唯一の『ドラマチスト』にして、二十四種の世話物は實に我文壇の光輝たり、或人の如きは讃美の極彼れを沙翁に比するに至る、吾人は彼れが遠く沙翁に及ばざるを信ずる者なれども、而も我文壇の重鎭を以て彼れに

許すに躊躇せざるものなり。

彼れが世話物中殊に秀でたるを『心中天の網島』及び『冥途の飛脚』の二篇とす、而して此兩者を比する時は『冥途の飛脚』は『心中天の網嶋』に一歩を讓るものと曰はざるべからず。『外題年鑑』の說誤らずとせば『冥途の飛脚』は正德元年の作にして、翁や世故に富み且つ其想熟したるべき五十九歲の時なり。今より少しく『冥途の飛脚』に述ぶる所あらんとす。

此戲曲に付き特に著しき事は其主人公たる忠兵衛及び此れに附隨する梅川の共に溫順にして而かも小心なる事なり翁は先づ忠兵衛の履歷と性質とを寫し出して

龜屋の世繼忠兵衛、今年二十の上はまだ、四年以前に大和より、

敗き金持つて養子分、後家妙閑の介抱内ゑ商ひ功者駄荷づもり、江戸へも上下三度笠、茶の湯俳諧碁双六、のべに書く手のかぢ、れて、酒も三つ四つ五つ所、紋羽二重も出ず入らず、無地の丸鍔象眼の、國細工には稀男、

と曰へり、思ふに彼れは『國細工には稀』なる才物なりしなり、『世帶を はり商賣事何におろかはな』く、萬事に器用に拔目なく立廻りしも、一度『籠の鳥なる梅川に、こがれて通ふ早雀、』戀の痴情に眼暗みて、母手代の目を忍びて、廓通ひの足繁かりしかど、猶は彼れが天性なる温雅と其中心の赤誠とは少しも曇らでありき、さればこそ『日が暮れると足を空に立ち歸り』ても、内の首尾を案じては『我家乍ら敷居高く』て得入りもせず、いらざる戯れに飯焚の萬をも驚かすの小心を見

はしき。又『北濱、靱、中之嶋、天滿の市のかはまでも、おやぢと云はる丶八右衛』に門口にわめかれては、

コレ其聲を母が聞けば、死んでも一分たゝぬ事、一生の御恩ぞ、

さりとては面目ない。

とはら〳〵と泣きし涙の中には養母に對する義理も見ゑ、温順なる彼の性もよく顯はるゝに非ずや、鬼ともくまん八右衛門をして、ほろ〳〵と涙ぐましめ、

云ひにくい事よう云ふた、丹波屋の八右衛門、男じや、了簡してまつてやる。

と迄言はしめしもの、彼れが持ちし天を貫くと言ふ至誠によらずんばあるべからず。

彼は又情に強くして意志に強かりき、されは其境遇の如何によりては時には正義を忘れ、道德を無視し、甚しきに至りては自已を忘却するに至る。此れ彼れが如き性情の者には、實に有り得べき事實なり、されば彼の八右衛門に、廓にて主人女郎を始め下女料理人うら若き禿迄並居る一座にて、『身代のたなおろし』をせられ、『若い者に耻ぢかゝせられ』てはあるにもあられず、懷の三百両是れ散らしては身の大事となるをもよく知りながら、『五十両引き拔いて額へぶちつけ存分云ひ我身の一分』且は『友女郎のまんなかで可愛い男が耻辱をとる梅川の心の無念晴らさん』ものと『ふつと金に手をかけてはもう引かれぬは男の役』ばら〳〵と散らせし井手の山吹は、情遂に意志に勝ちしより堪忍袋の緒が切れ、氣も有頂天となりし結果に非ずや、而かも尙は彼れ

は御損かけては首が飛ぶ飛脚の商賈、早晩刑場の露と消ゆる身と自覺しながらも、『生きうるゝだけ添はるゝだけ、たかは死ぬると覺悟し』て死期を潔くせさりしに、梅川にかゝりし情の沙汰に外ならず、搦められし時に於ける彼の言を聞け、『親のなげきが目にかゝり、未來のさはり是れ一つと、彼の温順なる情にては、一日も先に往生させて下されと拜み願ふ實父の顏を見る事を、得せざりしもことわりなりかし。』此より少しく梅川に就きて語らんとす、一口に女郎と云ひ、よねと云へど、彼等にも亦數等の階級あり、『生玉心中』に曰く、

先づ鉢植ゑの作り松、ずんど流しの一枝は大夫の威勢備はりて、恪氣の嵐手管の雨、無理な口說の霜雪も、驅がず痛まず彌增しに、情の綠蔓りて松の位と譬へられしも惜からず、春立ち行けば色うせて、

淋しき梅もすてられず、是天職の姿にて、一夜流れの軒端の梅の、仇な袂に香をとめて、さんさ思ひの種かいの、根から嫌なら添ふ氣じやないに、だまされて惜やつらやを逆樣に、客に泣かせて後朝の別れあやなきわやめ草、局女郎になぞらへて、云々

大夫は松の位とも云ひ、天職は梅天神格子女郎とも云ひ、端女郎局女郎見世女郎皆同体にして下等の者なり。要なき穿鑿かましけれど彼を觀るに幾分の必要もあらんかと思ひて、

梅川は『天の網嶋』の小春に見るが如き意地もなければ、又張りもなし、『餘所の勤めも柿の本、嶋屋を一寸嶋隱れ』して、『爰を思ひの定宿』の越後屋に來りて、朋輩女郎に『よひ所へ來て下さんした、こなさん拳の上手、宵からちよとせ樣にしつけられ、無念な敵とつて下さんせ』

と云はるゝや、『あゝうたての酒や拳をする氣もあらばこそ、この梅川が今の身を、少しは泣いて貰ひたや』と、來る早々何の隱し立てもなく自己の苦痛を打明けて、わけもなく他人に同感を求むるに、彼の張りなき本性は見ゆ。彼は深窓に育ちて酸きも甘きも知らざる一向世間見すの御姫樣には非れど、往々彼の社會にて見受くるすなはなるあどなき質朴なる性なりき、『田舍の客に請けられては、吾身一つは死んでものけう』と、公然衆中にて言ひしは彼のあどなきによる。『天神大夫の身ではなし、さもしい金に氣がふれた店女郎の淺ましさと、世間のどなへ朋輩のかもん殿を始として、格子女郎衆の手前もあり』とは、彼のすなはなるによる、『忠樣と本意を遂げ、とやかう人にうたはれし面がぬぎたうござんす』とは、此時に於ける彼の質朴なる本心なりし

なるべし。彼は白地に心中の苦悶を打明かして毫も隠す所なし、されば八右衛門が『女郎衆あんまりじや爰にも人が聞いて居る』、と云ふに對して『戀いたひが定じやもの惜ひなら來てたゝかんせ』と極川の言ひしころ、彼の心の反射にして總ての性質は無意識に出でたる此一語に籠れりとも言ひつべけれ、彼は遊女としては比較的世間見ずなり、御嬢樣的なり、自己の心清きを以て人も清き者と思ひ込み、人言を疑はず、忠兵衛と八右衛門と腕まくりして、ぎしみあふや、彼は所思を吐いて忠兵衛を諫めぬ。

何をあてに人の金、封を切つてまきちらし、詮議にあふてちうびつの縄かゝるのといふ耻と、此耻と替へらるか、耻かくばかりか梅川に何となれと云ふ事ぞ……、氣を靜めて下んせ、からは誰がした、

わしがした、皆梅川が故なれば、添ひやらいといやら、心を推して下さんせ。

理を說くか如く、情を捋ぶるが如く、言々錯雜し、句々紛亂し、『小判の上にはら〳〵と涙は井手の山吹に露置き添ふる』眞狀を見るが如くなり、忠兵衛が問に合ひに、敷き金とごまかし、梅川が身請さらりつとすませば、彼は復忠兵衛を誠と彼の裏なき心より推して思ひしかば、忠兵衛が『べた〳〵したなり、帶もきり〳〵と仕直しや』と、滅多にせくを、如何で怪まざらんや、『何ぞひの一代の外聞朋輩衆へも盃事、暇乞もわけようしてゆるりと出して下さんせ』との一言には、忠兵衛ならぬ者も誰か其無邪氣なる心根を美しからずとせんや、張りなき彼は松にかゝれる藤の如く、男によらずしては立ち難きなり、『二人死ぬれば

本望、今とても易ひと、分別すゑて下さんせ』と、云ひ出しては見たものゝ、『生きらるゝだけ添はるゝだけ』と聞き、『ハテさうじや、生きらるゝだけ此世で添はうとは、力と頼む男に其身を全くまかせたればこそ、我は略ぼ此れにて両者の性質の大体を説明したれば此れより進みて『冥途の飛脚』に付いて大略の解拆を試みんと欲す。

鶴屋の養子忠兵衛は、身にも應せぬ梅川にのぼりつめ、深くなりゆくまゝに何としても離れ難く、互に思ひ思はれて、日に〳〵増さりゆくのみなるに、嶋屋の田舎客張りわひかけ、既に請出す談合極まりしとか、此を聞きし時の梅川の嘆きもさる事ながら、忠兵衛の驚きもいかばかりなりしならん、素より有福ならぬ家の加ふるに養子なれば、諸事氣兼も多かるべく、母手代の目を忍びてへつり銀にて通ひし程なれ

ば何として其談合の破らるべき、忠兵衛の如き性情の者此時に際して如何んぞ能く其情を制し意志に從ふを得べき、於是乎幸か不幸か八右衛門へ登りし五十兩。煩悶の折とて『何かなしに懐の中に押し込みし』心の奥を探れば、友達の事なればとの身勝手なる考もありしならん、彼が如何に梅川に溺れ居りしとはいへ、義理も辨へざるにはあらず、知ればころ『留守の中に方々の便ひ、妙閑の耳へ入つては如何樣の首尾になつたもきづかはし、誰れぞ出よがし内證を篤と聞いて入りたし』と門口に立ち煩ひしなれ。八右衛門に責められても非の已れにあるを知れば罪を謝するに吝ならず、果ては

此忠兵衛を人と思へば腹も立つ、犬の命を助けたと思ふて了簡頼み入る、是を思へば世の中に、御仕置者の絶えぬも道理、此上は忠兵

衛も盜みせうより外はない、男の口から斯樣の事、云はれう者か推量あれ、咽より劒を吐くとても是程にはあるまじ。

男の一分捨てゝ飽迄も已を卑下したる言辭に誰か怒る事の出來得んや、八右衛門ならぬ者も『了簡してまつてやる、首尾ようせよ』と云ふを難んぜざるべし、此時内より母の聲なからんか、或は中の卷の大破裂程の破裂はなかりしやも知るべからず、律義一片の母が『サア今渡してあげましや』の一言は、忠兵衛の耳には如何に鋭く響きたりしか、言はぬ身を耻入らせんとする母の心をも彼は恐らく氣取りしならん、氣取りたらば少くとも母の前のみにても商賣の尾は出すまじきなり、五十両せつかれし此時の彼は『狂氣の如く氣をもみ』あせらさるべからず、なしと云ふてすむべきならねば何として一時を詐るより他に途

なし、燒物の髮水入れて此の如くにして起る、この髮水入が後の破裂の大原因とならむとは、神ならぬ忠兵衛いかで知らんや、されば中卷にて八右衛門が髮水入れを証とし、一片の友情を以て寄せつけぬやう賴みし時之を聞きし忠兵衛いかで憤然たらざらむや、男づくで渡せし髮水入を廓三界迄披露され、我の一分捨てたるは忍びても忍ぶべけれ、『可愛い男が耻辱をとる』此梅川の無念を如何にせん、胸中亂れに乱れて理も非もわかず苦しき刹那、『ふつと金に手をかけてもう引かれぬは男の役』此時既に彼の胸中に死の影象描かれたりしならむ。一旦斯うと覺悟して打つて出し上は、誰が何と云ふとて男の意氣地ためく〳〵と引き下かられむや、梅川の言葉をも反故にして身請をせし時は上氣し果て、人と我れとを分たず、一念唯死の方にのみ走せて梅川も

既に這般の事情を知り居る事と思ひしなり『何ぞいの一代の他聞』と何心なく勇む梅川を見し時、初めて尙は彼の知らざるを覺りぬ『ひどしや何も知らずか』とは何等沈痛の言辭ぞ、夢の如く幻の如かりし空想は去りて現實界に歸れば、何心なく勇む顏を見て如何でか涙を禁ずるを得んや、今や彼等二人の死すべき時は來りぬ否死せざるべからざる運命は彼等の脚下に迫りぬ。

下の卷は此悲壯劇の大詰にして、彼等二人既に死は覺悟しながらも尙は互に未練ありて、一日も長く嬉しき夢に醉はむものと大和路さして逃延びしが、遂に搦めとらるゝ迄なり。

以上余は多く忠兵衛に就て言ひぬ、其は此篇の主人公は忠兵衛にありて、梅川ならずと思考したればなり。

是より本篇の結構に就て少しく言ひ、以て筆を措かむ、上の卷は主人公忠兵衛の素性を明かにし、梅川との關係を說き、一曲の最高點、所謂『山』と云ふ者の準備をなせり。

凡そ戲曲には必ず一箇の最高點なかるべからず、即其經過の中間に於て準備的動作の間に、因緣まさに熟するも未だ其果は現はれず、滿引して尙一矢弦にかゝるが如く、僅に一指を彈ずれば全局俄然として大破裂に至る所なかるべからず、此篇にありては即ち、此れ中之卷なり、上の卷の準備的動作の中に、八右衛門の性質、鬚水入れ、五十兩の借財等因となり、忠兵衛の性質緣となり、將に來らんとする最高點の準備全く終りぬ、因緣漸く熟して方に果を生まんとする一彈指は、實に越後屋にて八右衛門が『忠兵衛の事に付耳うち』したりし

瞬間なり、二階には梅川の聞くあり、表に忠兵衛は立聞けり、其とは知らず八右衛門

是も買へば十八文、いかに相場が安いとて、五十兩を二分五厘かへ、神武以來ない事、友達さへ是なれば他人をかたるは御推量、此次ぎは段々に市着切からやじりきり、はては首切りいかにしても笑止な、あの如く亂れては主親の勘當も、釋迦達磨の異見でも、聖德太子がおきに教化なされても、いかないかな直らぬ。

之を聞きたる忠兵衛、狂憤自棄二百兩の封金を破つて大破裂になりぬ。下の卷は道行相合籠にして大詰をも兼ねたり、親孫右衛門を點出して興味を添へしめぬ、彼が

久離切つて親子なれば、善いにつけ惡いにつけ、かまはぬ事とは云

ひながら、大坂へ養子にいて利發で器用で、身をもつて身代もしあげたあの樣な子を勘當した孫右衛門は、たはけ者阿房者と云はれても其嬉しさはどうあらう、今にとさがし出され繩かゝつて引かるゝ時、よい時に勘當して孫右衛門はでかした仕合せじやと、ほめられても其悲しさはどうあらう、今から思ひ過ごされて一日も先に往生させて下されと、拜み願ふは今參る如來樣御開山佛に嘘はつかぬぞ、と土にひれふし嘆きたる一言一句、誰か腸を斷たざる者あらんや、大詰は果を寫せば足る者なりと雖、其にては餘りに興味なければ親子の愛を寫せしなれ、一篇の戲曲として見る時は所謂『山』と何等の關係もなければあるもよしなくとも可なり。

吾人此篇を讀みて此を彼れの最傑作『心中天の網嶋』に比す、數段の遜

色あるを認む、渾然たる事玉の如く、脈絡井然一語の加ふべきなく、一句の削るべきなき彼は眞に天工とも謂ひつべし、此はた凡作に非すと雖讀過一度彼篇程の悲壯的快感を感せざるは此篇の未だしき所以なるべし、是抑何によるか、吾人は思ふ此の葛藤の彼に如かざるに由るに非ずやと、『天の網嶋』の葛藤はお三によつて、太兵衛によつて、孫右衛門によつて、最多く五左衛門によつて遂に解くべからざる終極の運に達しぬ、治兵衛小春の望を絶ち、身を殺さゞるべからざる徑路の悲壯なるに、誰か涙を濺がざらんや、葛藤の強ければ強き程讀者の悲壯的快感も強からんなり、『冥途の飛脚』の葛藤は如何、衆人の一坐にて八右衛門の嘲罵的友言か最大なる者にして、梅川に張合かけし田舍客あるも其一と言はゞ言はれざるにわらねど、主として其友言にあるや

論をまたず、否其のみと言ふも殆不可なきが如し、其嘲罵誹謗に傾き過ぎたるには忠兵衛ならぬ者も得堪ゑざりしならむ、況んや短氣は損氣の忠兵衛三百兩の封金を散らせしも無理ならじとは知れど、何となく物足らぬ心地のせらるゝは、是れ葛藤の弱きに傾きたるによるに非ずや。

予猶語らむと思ふ事多けれど今は暫く右に止めむ。『冥途の飛脚』の詳細なる評論に至りては、坪内博士を初め其他早稻田派の諸子の說を參照せられよ。此所には唯だ自ら思ふふしのみを、拔序もなく書き綴りたれば、前後轉倒せる所又は誤まれるふしも多からむ、此は唯讀者諸君の叱正を乞ふのみ。

山家の夕さり

一笠一杖飄然都門を辭して身を雲水に委ね、此處の山彼所の水、其より其へさすらひて世を送ること五十年、或は鳴立澤に世をはかなみ、或は松山の霧に咽びて昔を想ひ、或は江口の雨に惱みてつれなきを嘆きしなど、其時と其景とは錦心に映じて幾多の美珠となりたる西行法師の家集は、人麿貫之以後に於て特に秀でたる者として許さる、嗚呼此一部の山家集抑何をか意味する、日落ちて風涼しく、何事もなき山里に隱れて、再唱又三唱、時に甘心の詠なきに非ざるなり。

曇りなき鏡の上にゐる塵を
目にたてゝ見る世と思はゞや

至大の善も尙湮沒して傳はらざる者あるに、惡と云へば爪の垢程の者も口より口へ傳はりて、はてはあらぬ事まで我事として取囃さるゝこと口惜しき世と云ふべけれ、世と思はゞやとすましたる所、さるにてもかれは上人なりけるよ。

吉野山やがて出でじと思ふ身を
花ちりなばと人やまつらむ

凡夫には佛の心知り難く、儒者には町人の心計り難かるべし、只管に花見むとて行きたるとのみ思ふ者あしきか、花に事よせて世を遁れむとする者わらぬか、心々の世には鳴く蟬を何の爲と怪む人のあるも無理ならぬ事なるべし。

おろかなる心にのみや任すべき
師となる事もあるなるものを

我等にとりてもよき訓誡なるべし、瓦も磨けば光を出すの譬も思出されてそゞろゆかしうこそ、本居大人のよみ給ひけん『折々に遊ぶ暇はある人の暇なしとて文よまぬかな』と共に、吾等の忘るべからざる詠ならむ。

こりもせず浮世の闇に迷ふかな
身を思はぬは心なりけり

一度罪業を犯して恐ろしき報のありしにも拘らで、猶もこりずまに深く五欲の巷にさまよひ、執着の念脱すること能はざる凡夫の身のげに浅ましきかな、一に心身の快樂を貪りて之れが爲めに身の亡ぶるを知らず、甚だしき自家撞着をなして然も自ら悟らざる扨もをかしの人の心や。

あふことを夢なりけりと思ひわく
心の今朝は恨めしきかな

つまらぬは題詠といふ者なるべし、流石の山家集中にも題を設けて詠みたるには綺麗なるはあれど、これはと手うつ程のは少なし、我は此吟に就ては別に何も云はざるべし、小野小町の詠なる『思ひつゝぬれば夢かうつゝか移り香のさめてくやしき曙の空』優劣は諸子の判定に任ばや人の見るつらむ夢としりせばさめざらましを』とは同曲異巧なり、序に掲ぐ、趣は異なれど本居大平に頗る纖巧なる詠あり『あひ見しはす。

玉章のはしがきかとも見ゆるかな
とびをくれつゝかへる雁がね